

禁  
 談  
 原  
 多  
 曲  
 一  
 代  
 記  
 一

K939  
 S67  
 267-1

13-945





K939  
S67  
コ67-1

三遊亭圓朝演述

若林珪蔵筆記

圓朝

叢談

鹽原多助一代記

第二十編

本丸  
若林



速記法研究会

序詞

炭賣のおのが妻みそ黒からめと吟せし秀句あらかくよ黒き小袖に鉢巻や其助六がせりふよ云ふ遠くは八王寺の炭焼賣炭の齒欠爺近くは山谷の梅干婆よ至る迄いぬる天保の頃までハ茶呑咄しよ残したる炭賣多助が一代記を拙作ながら枝炭の枝葉を添て脱稿しも原來落語あるを以て小説稗史よ比較あバ所謂雪と炭俵辨舌は飾れど實の薄うるも御馴染甲斐よ打寄る冠詞の前席うらギツシリ語る大入は誠に僥倖當り炭俵の縁語よ評さへ宜を例の若林先生が火鉢よ何らぬ得意の速記よ演舌るが儘を書取りましが寫るよ速きは消炭も三舍を避る出來榮よ忽ち一部の冊子とありぬ抑みの話説の初集二集は土竈乃ハツト

鹽原多助一代記

速記法研究会



せし事もあく。起炭の賑やかなる。場とても何ら縁と後編は駱駝炭の立消あく。鹽原多助が忠孝の道を炭荷と俱に重んじ。節義は恰も固炭の固く取て動かぬのゝ。獸炭を作て酒煖めし。晋の羊琇が例ふ。做ひ自己を節して費用を背き。天下の民寒死者多し。獨り温煖あらんやと曰ひし。宋の大祖が大度を慕ひ。普く慈善を施せし。始め螢の資本と云ふ。炭も焼べた大竈と成り。始末の満尾迄。御覽を冀ふと言ふ。この端書せよとの需はあれど。筆持すべき白炭や。焼ぬ昔の雪の枝。炭屋の妻程黒からで。鈍作意の炭手前。曲り形ある飾り炭。唯管炭のくだくしけき。輪炭。胴炭。點炭と重ねて御求め有之様。出板人よ差代り。代り榮せぬ序詞を斯は物しり。

三遊亭圓朝記

余一度人の言語を直寫して其片言隻語と洩さず之を筆紙に登せ讀者をして其言語を直聽するの感あらむ。速記法を研究せしより議會演說講義等の筆記は聘せられ之を實際に試み頗る好評を得しが世間未だ此速記法の効用至大あるを知る者多からざるを以て此法と擴張して博く世に益せんと欲し曩も東京稗史出版社の需に應じ落語家の巨擘三遊亭圓朝子が人情話の中に就て最も著明なる怪談牡丹燈籠の說話を傍聽して直寫せるもの十三冊を出版せし。世人初めて速記法の妙を知り實に圓朝子が人情話の寫真ありと賞賛して争ひ購ふに至れり。是に於て尙ほ其妙を知らぬゆゑに爲め再び圓朝子に謀り牡丹燈籠より次で好評なる鹽原多助一代記の談話を演ぜし。一層注意を加へて之を筆記し印刷を鮮明にし挿書を精密に。精裝を美麗にして我が速記法究研會より發兌すること。あれり。此書を讀む者皆我が速記法の効用を覺るのみならず多助が一代の行爲と薄資を以て巨萬の富を得たる顛末を玩味せば子弟の教戒商家の龜鑑とあり。世を益すると少々にあらざるべし。看客此意を諒し我が速記法の効用と圓朝子が作意の信切とを味ひ輕々に讀了すると勿れと云爾。

明治十九年七月

若林用藏識





浪人塩原角右門

由乃ふいおか

百姓角右門

悪僕仁助

雲橋芳蔵画





原丹治

塩原重保



百性多龍三門

佐原の根

原丹治伴丹三郎



塩原多助

多助の嫁おはか

歌川

國久画



悪漢小平

塩原南右衛門喜八





あづき川はき



鹽原多助一代記第壹編

三遊亭圓朝演述  
若林珪藏 筆記

第一回 山村主從語二奇遇  
忠僕苦心危二其身

扱申上まするお話しは。鹽原多助一代記と申しまして。本所相生町二丁目  
で薪炭を商ひ。天保の頃まで傳はり。大分盛んで。地面二十四ヶ所も所持  
して居りました。其元は上州沼田の下新田から六百文の錢を持って。出て  
参りました身代で御坐ります。其頃の落首に。本所に過ぎたるものが二  
つあり。津輕大名。炭屋鹽原と歌にまで歌はれまして。十萬石の御大名様  
と一所に喻へられます位ある。其起源は。僅かの端錢から取立まして。  
五代目まで續きまして。其多助の身の行狀の端正いのだ。孝行なのだ。殊  
に商法の名人で。經濟よ長じて居ることは。立派な學者でもかゝはん程

鹽原多助一代記第一編  
速記法研究會



多助は別に學問もありませんが實は天稟て居りますので。今に淺草  
 八軒寺町の東陽寺といふ寺の墓場に鹽原多助の石牌があります。其  
 石牌は實父鹽原角右衛門、養父も鹽原角右衛門と。法名が二つ御坐いま  
 すが。實父も。養父も。同姓同名で御坐いますから種々と調べて見ますと。  
 上州沼田の下新田よ。未だ縁類も残て居りますから聞糺しますと。實父  
 角右衛門は元と阿部伊豫守様の御家來で。八百石を領ました者ですが。  
 何云ふ譯か。浪人して。行衛知れずまゐりました。其角右衛門の家に勤め  
 ました。岸田右内と云ふ御家來が有りまして。其者が若氣の至りで。角右  
 衛門の御新造の妹おかめと密通をして。家出をいたし本郷春木町裏  
 家住居をいたしまして。名も岸田屋宇之助と改め。旅商ひをして居りま  
 すが。實に戀は思案の外で御坐います。右内は忠心の者で御坐いますか  
 ら。旅商ひをしあがらも。旦那様は那邊よ御出か。どうかお目よ掛り度と。  
 主人の事と片時も忘れた事はありません。不圖沼田に主人の居る事を  
 聞てから。日光の中禪寺の奥へ三里入ると。温泉がありますから商ひあ  
 がら参りましたが。其頃は開けせんから湯場も鶴の湯と川原の湯と  
 二ヶ所で。旅宿もあります。其中に吉見屋と云ふ宿に泊りました。道伴  
 は塚屋傳吉と云ふ。岸田屋の宇之助と旅商人仲間て。兩人ハ親密で御坐  
 いますから。兩人はこれから沼田へ山越しをいやうと云ふので。道を聞  
 ますと。山道でとんと往來がありせんので。極難所ですから。案内者が  
 あければいけません。聞て其夜の中。案内者と頼みまして。翌朝にあ  
 ると。宇傳吉さん。案内者は。傳今聞てるんだが。モシ。宿の旦那。案内  
 者は宜しう御坐いますか。ね。主ハイ。心得ました。昨夜はどうも商  
 ひにれ出ます。つて多分のお茶代と載て濟ません。何卒明年も御心配な  
 くる。ア傳イヤ。眞の心ばかりです。此の宇之助さんは沼田へ行きたいと  
 云て。私も煙草と少し仕入に往ふと思ふのだが。大分道が。知れにくいそ  
 うだから。昨夜から案内者を御頼み申たのだが。ありましたか。主ハイ



案内者は最う頼み置きました。お辨當も拵へましたから傳「何卒強  
 壯そうあものと頼んでねくんなせへ主「エ、強壯いのを頼みました。コ  
 レ磯之丞」傳「磯之丞といふのが案内者ですか主「左様で御坐います  
 傳「軟弱そうあ名であまめいた名ですあ主「ナアに頑丈あもので御座  
 りやす。と云ふ所へ出て来たのは。脊は五尺七八寸もあつて。臑に毛の生  
 て居る熊をみたやうあ男がノッリと立て案内「へイ御案内「やせう傳  
 どうも演劇なら磯之丞あんと云ふと突き轉ばしがする役だが。コリヤ  
 強そうだ而して前ハ跣足かへ案「エ、跣足です。脚半も穿かあいで一  
 重物に小倉の帯をチョツ切り結びよして。鐵炮を擔いでとります傳「モ  
 シ」腰にある毛の生へた巾着はあんだへ案「これは狐の皮で拵へた  
 んでがんす傳「カウどうだへ」狼は出やいませまいねへ案「狼は出ねへが  
 大蛇や猪が出まさら。あアに出ても飛道具ウ持て居るから大丈夫で御  
 座りやす。貴所方の荷物をあ出しあせへ。と二人の荷物を聯索のやうあ

もので脊負ひ。其上に鉈を付けて出掛て往く主「左様あら御機嫌宜ろし  
 く。磯之丞氣を注げて上げろ傳「左様あら御機嫌宜しく。と暇乞ひとして  
 西の方へ出掛ました。花野原と二三町往きますと。潺々流れが在て。別  
 に路とてはあく。澤を渡りて歩行くと七八町参りますと。これから山手へ  
 掛るに從がひ。熊笹が生へて居て。歩行くたびよソソとして。朝露に  
 袖を濡しまして段々と登る程は熊笹は脊を越し向ふが見へず傳「オイ  
 案内さん。少し待てくんあ狼が出て。大蛇が出て。分らねエじや  
 ねエかへ案「狼が出て。大丈夫でがんす主「此様お所はどの位あるへ案  
 「未だ廿町ばかりありやす傳「どうも驚いた。熊笹も熊屋にあると随分粹  
 あもんだが此様おにあつちヤア不意氣あもんだのう。と話しをいあが  
 ら漸く登りますと。是れから金精峠と申て實に難所で樹木は榎松と  
 雁翅檜の大樹ばかりで。彼是れ一里半ばかり登りますと。西の方は日光  
 の男體山。此方は白根山が見へます傳「どうだい酷い所だねへ。どうだ



へあんとか云たッけ。磯の丞さん。酷い所だね。此様を所ぢやアあいと  
 思ったが。これぢやア大蛇も出ませう。どうだい字之さん。字酷い所で御座  
 います。私も是程とは思ひません。是れから又登るのかへ。案「みれからア  
 ハア下ります。と云ひながら。これより一里ばかり下ります。と。溪の流れ  
 でドウ〜と流れる。山には草も花が咲て居ます。見馴れぬ草で名  
 も知れない草の花が咲てをります。溪の水で咽喉を濕ほして。それから  
 一里半ばかりも登ります。見上る程の大樹ばかりで。兩人は草臥れた  
 から大樹の根まドツカリ腰を掛けて。傳「字之さん辨當を遣ふじやあ  
 か。案内さん辨當を出して下さい。案「ハア随分草臥やす。傳「前は能く馴  
 れてるから草臥あいやうだね。案「私あんざア年中斯う云ふ所と歩行  
 てるから平地は却て歩行き悪い。といひながら。兩人が辨當を開けると。  
 大きな握飯が二個と梅干の堅いのが入れてある。傳「何だい。大變大きな  
 握飯じやあいか。もつと幾個にもしてくれ。ばい。に。梅干は眞赤で堅

ひねへ。ア、酢ばい。案内さんの握飯は大きいね。案「私ア此奴を半分  
 喰て又明日半分喰ふのだ。傳「奇いね。茶か何か貰いてへものだね。案  
 「茶も何もありません。六里の間家がね。から字「それぢやア水を汲ん  
 で来てくんね。案「水もありやいね。字「それでも先刻流れて居たじや  
 アね。かエ。案「ハテ山の上から搾れて打落してめへるだから下にハあ  
 るが山の上には水はありやいね。字「奇いね。スツポリ飯を喰ふのだ。  
 と小言を云ひながら。辨當を遣てサア〜下りませう。と。これから二里  
 ばかり下ります。と。里近く成たと見へて水がドウドツと流れて。雑木山  
 が在て。向ふに薪をこあして居るは此山村の杣と見へて。傍の方に山管  
 で作つた腰袋に谷地草で編んだ山岡頭巾を抛り出して在て。くすぶつ  
 た薬罐と茶碗が二個と辨當が投げ出して在るを見て。傳「字之さん水の  
 在る處へ来ると茶があらア。向ふ杣だか何んだか居るやうだぜ。申し  
 少々ね願ひ申すが。私共は日光から山越をして来ました。が此處よ

鹽原多助一代記第一編



茶か何かありますすが戴けませうか「ハイぬるく成りましたらふが宜しければお飲みなさい」宇「モシ貴所の御宅は此近所ですかエー」柳「ハイ是より二里ばかり下で御座います傳「それじゃア此薪は背負て下るのでそかエ」柳「イ、エ。此難所と薪と擔いで下りられませんか」傳「それじゃア馬の脊で下ろしますのか」柳「イヤ馬では猶いけません傳「それじゃア何しますへ」柳「此谷川へ投り込んで置きますと恰ど翌日の晝時分よ私共の村に流れて着ます傳「へーのんきなものですか」お茶を一つ戴きますよ。と云て居る所へ雜木山から出て来たのは其柳の女房と見へて。歳比は二十七八で。色白く鼻筋通り。山家よハ種あ女で御座います。細帯よ兩裾を端折り亭主の手助けをして居りますものと見へ。兩人とも中よく働いて居りますを見て傳「宇之さんかういふ山の中の女だから猶ほ目立ちやすが。斯様あよくすぶつて居るが是れを江戸へ持て往て磨て見ねエ。とん紙屑買が見たはしても奥様の價格があるぜ」宇「へー成程。い、人柄ですぬへ。と思はず宇之助が見ると。八年跡に別れました。主人鹽原角右衛門夫婦故。お懐かしいどうして此様を處よ御出なさいましたと。婦人の側へばら〜と駆け寄りまして。草原へ手を突きますと。清「オヤマア右内だよ。旦那岸田右内」御座いますよ。角「ナ、右内か懐かしかつた。と云はれて右内ハ涙ぐみ」右「エ、其様ナれ身形に御成あさいました。此様お山の中よれ出あさいますか。お情ない事で御座いますナア」柳「イヤもう浪人して別に便る所もあいか。此村に元家來の惣助といふ者がぬるからそれを便つて来て。少しは山も田地も持て居たが四ヶ年跡の山出水で押流されて。どうも仕方がないから此通り秋ハ樵をして。冬よなれば獵人をして。漸々暮して居る。實に尾羽打枯らした此姿で此所へ逢ふとは思はあんだのナ」右「へい〜」私「家出をいたしましたのは八年跡。其時は無御立腹を成さしましたらふナ」柳「其折は悪い奴主人の妹をそ、のかし家出と致すは不埒者と云て居たが此五六年此方

程。い、人柄ですぬへ。と思はず宇之助が見ると。八年跡に別れました。主人鹽原角右衛門夫婦故。お懐かしいどうして此様を處よ御出なさいましたと。婦人の側へばら〜と駆け寄りまして。草原へ手を突きますと。清「オヤマア右内だよ。旦那岸田右内」御座いますよ。角「ナ、右内か懐かしかつた。と云はれて右内ハ涙ぐみ」右「エ、其様ナれ身形に御成あさいました。此様お山の中よれ出あさいますか。お情ない事で御座いますナア」柳「イヤもう浪人して別に便る所もあいか。此村に元家來の惣助といふ者がぬるからそれを便つて来て。少しは山も田地も持て居たが四ヶ年跡の山出水で押流されて。どうも仕方がないから此通り秋ハ樵をして。冬よなれば獵人をして。漸々暮して居る。實に尾羽打枯らした此姿で此所へ逢ふとは思はあんだのナ」右「へい〜」私「家出をいたしましたのは八年跡。其時は無御立腹を成さしましたらふナ」柳「其折は悪い奴主人の妹をそ、のかし家出と致すは不埒者と云て居たが此五六年此方

遠近法研究會  
鹽原多助一代記第一編



塚屋傳吉

岸田右内



塩原角右衛門

角右内妻おせ

山中  
右内不計  
奮主逢





懐かゝくして實に逢度存じて居たナ。清そうして妹のかかめへ無事で居るか。右へい壯健で御坐います。お宅を家出しましてから只今では本郷の春木町に裏家住居として居ります。外へ斯と云事も存じませんか。只今では斯遣て旅商ひを致して居りましても主公にお目も掛りて。お詫事をして戴きたいと旦暮存じて居りましたが。此様な山の中にお出とは存じませんが。沼田の方に御在ると云ふ事ですから日光から山越をして参りましたも若しや主公に目掛られる事もありませうかと。神佛を信じて居りました甲斐が有て。お目に掛る事が出来ました。と涙拭へば。搦もある様子だが今晚は私の家へ泊つては呉れまいか。右へい泊つても宜しう御坐います。商人仲間の伴が有ますから彼男を先へ歸しませう。と咄してゐると傳吉「アイ宇之助さん」。オヤ彼の女にへい。これ辭證をして居るよ。辨當の餘りでも貰ふ氣じゃアねエか。宇之助さんどうしたい。右へ私は今少々譯のある人に逢て今晚泊らなければありませんか。貴君へ明日沼田の大竹屋といふ宿屋へ泊りあすつて下さい。殊に寄たら二日位遅くあるかも知れぬが傳左様かい。それじゃア先きへ往て居るヨ。お前が三日位かゝつても待つて居るヨ。それじゃア磯之丞さん先へ往ふ。とこれから別れて案内と兩人建立て参ります。此方は三人で女房が樂鐘と提げて右内か脇へ附きまして。漸々山道を小川村へ二里ばかり下りて横に又四五町入て見ますと。屋根には板の上へ石を載せて嵐を防ぎ。實に見るかげもあいな山住ひで。中へはいると。大きな爐が切てあつて。竹自在へくすぶつた藥鐘が掛つて居ります。留守居をして居りますのが多助といふ八歳ある角右衛門が一人の子です。これが後へ搦原多助と申て。天下へ名高ひ人へ成ります者です。から自然に他の子供とは違ひまして。おどあしやかに居ります。右内は如何に御運が悪いとて八百石領の御身の上。人が通はぬ山中の斯様な芽屋へ住つてゐてに在るのか。御情ない。と氣の毒そうに



上つて来ました。右「誠に思ひ掛けあぐれた目も掛りました。ア、清「ア、右内や。お前が屋敷を出る前に産れた多助と云ふ倅はこれだヨ。右「エ、那の御坊様で御坐いますか。御親父様に能く肖ていらッしやいます。私「は右内にて御坐います。貴郎は御存じ御坐いますまい。ア、多「何だか知んねへやい。右「どうも丸で田舎語も成てた。仕舞遊した。ア、と涙を拭。右「成程獵師の家のやうで御坐います。ア、鹽「何いろ一抔つけ。ア、是から女房が支度をするの。前川で捕れた鰯に苦御といふ。魚に其比書津邊から回る味淋のやうな眞赤酒で鹽「エ、これは奥州から来る石首と云ふ魚の干物だ。一個お喫べ。右「へ、どうも御新造様の酒酌で恐れ入ります。ア、私が家出をしましたのは矢張八月朔日。其年の三月の御節句。御客様の歸た跡で。御新造様の御酌で白酒と頂戴した。事杯をかめと。噂をして居りました。家出をしたのもかめが懷妊を致しました。故で御坐います。只今では七歳に成り名をえいと申す。清「チ、左様かへ。お前に肖てもかめに肖てもいゝ子だらうが。見る事も出来まいのヲ。右「それでも渠が裏家住居に馴れて誠に當節はよく馴れて居ります。働きのあい私にて御坐います。不自由勝で。へい妙を御酒です。ア、清「お前は喫た事はあいらう。右「へい甘いやうな。酢ばいやうな。變です。ア、へ、これが會津から来るので。鹽「ア、其方の親父右平は屋敷も永年奉公をして呉れて。其倅の其方も屋敷に勤めて居たのだから。家来とは云ひあがら。家来でない。殊には私の妹を女房ふして居るから。舍弟も同様。でのチ、清「旦那様。故あつて御浪人遊ばしても。固い御氣性だから。二君に仕へ。と云て。おいで。だが。此倅はどうか世に出たいと思て居る。が。私の甥に當る。戸田様の御家来で。野澤源作といふ者が。宇都宮の藩中。だからそれへ頼まうと思て。度々書翰を遣た所が。どうか重役も相談して。世話をして上げます。から。夫れも就て。どうか話しをしたいから。出て来いと云て。返事を寄越した。が。四年跡の山水で。田地から。諸道具衣類迄。

八



皆流されて失つた故今ではどうする事も出来ず。今か金が五十金あれば江戸の御屋敷へ住み込みが出来ると。だから此處で妾が頼みだがかめと兩人でどのやうにも才覺して送つては呉れまいか。右「へいど  
うか致しませう。鹽馬鹿ア云ふ。旅商人の右内に五十金出来やう。管は  
ない。清それだつて良人これに頼むより外は仕方が御坐いません。それ  
に右内は家出とする時家の金と甘金持て逃げておいでだヨ。右「エ、  
誠に恐入ます。只今では金子の出来やう管は御坐いませんが來年の三  
月まで御持ちくださればどうか致しませう。清「來年の三月じや遅い  
じやないか。是非今年の中に。と云ても雪が在て來られまいか。どうか今  
年の中に送つて呉れ。右「ナにどうか致しませう。あア子があければ。か  
かめを勤め奉公に賣ても。エこれは御新造様の前で。かにどうか致しま  
せう。と口には云ても右内が今の身の上では才覺の出来様道理は御坐  
いませんが。どのやうにも才覺しやうと。考へながら其晩は寐まして翌

日出立とをるを彼是と引留められまして書少し過ぎ。漸々振切て出  
立し。す。と此方の親子三人で須賀川の堤まで送て参りました。右「左様  
なら御機嫌よろしうと云ので。此方も見送る。右内「見返りながら金の  
出来やう管はないが神佛の恵でもどうか才覺したいものだ。と考へな  
がらうか。と大原村と云ふ所へ掛りました。所が大きな草臥れまし  
た。から茶店に腰を掛けて休んで居ると。其處へ入て來たお百姓は年齢  
四十四五で木綿のぼうた布子。羽織を上着て。千草の股引で。御納戸  
色の足袋。草鞋を穿き。客「誠久しく逢ひませぬ。婆「オヤア。角右衛門  
さん。おあがん。あんしよ。角「鳥渡來てへと思ふが。秋口よ。なる。と用が多く  
ッて來られねへで。マア老婆も壯健で。婆「誠。此間も貴所の方へ向けて  
遣たら。演劇を見せて呉れる。と云ふ。から遣た所が角さん。あればこそ世  
話アして見せて呉れて。娘子を遣たら。能く世話アして呉れやした。歸つ  
て來て。とんち狂言だつた。と云ふも。何んだかしんねへが。辨慶編の衣物



を着たお士が出て来て。脇差の柄へ徳利を提げて居たが餘程酒の好きなお士で。跡から機織女か緒手巻を持って出て来た所が其娘子を士が脇差で突つ通す。女が亂髪打振て眼晴まわして。はつこりゑつたつて云やん。おから跡で聞たら。妹脊山の狂言だつて角「ハイ碌と構へませんでハア。家のお爺さんの居やん。おかなア。婆へ居りやん。お新田の角さんが来やしたヨ。九兵衛へ貴所無沙汰をしやんした。貴所見せへえと思つて居た青爪で三歳五ヶ月なる馬でい、馬だ今見せるから待て下せへ角「ア、馬かへ九「マア物を見なせへと云ひつ、牽出して来たのは實は駿馬とも云ふべき名馬で角「ヤアい、馬でがんすナア。九「貴所此馬は實は珍らしい馬で。ねへら一つ起して。噫一つした事がねへ。どんな馬で。曳まわしても足は血溜り一つ出来る馬じゃねへ。見なんせへ角「マア見へるか。と云ひながら齒を見たり。瓜を見たり。前足を撫てたり。暫く見て居りました。角「コリヤア買てへねへ幾許だア。九「五兩五粒だつて角「貴へなア。九「貴つて五兩五粒がものはあらア。角「左様けへ。己ア。今金はあるが千鳥村へ田地の掛合ふ来たんだから田地が賣買ふならなければ歸り直ぐ買て往くから何もしろ手附を置いて往から馬を置いて下せへ。と懐中から取出し。桐卷の。木綿か。細か。知れませんが。ズルとこいて落ちた金。七八十兩もありました。うが。其中から一兩出して角「サア此處へ置きや。と。残りの大金を懐中へ括し附けまして角「外へ買らねへやうよ。左様なら婆「左様なら。歸りよお寄んなんぞよ。先刻から兩人て話しをえて居るのを。岸田が見るとはなし。其處へ落ちたのは大金。ア、有る所は有り餘るものだ。あの金さへあれば主人を世に出し御恩報しも出来るものと思ふ。す。と。炮の出る程欲くつて堪らないからウカくと思ふ。す。知ら。逢。貝。村。まで。彼の。百姓。の。跡。を。尾。て。来。ま。し。た。百。姓。の。それ。と。知。ら。ぬ。谷。合。まで。掛。り。ま。す。と。右。も。し。且。那。へ。角。な。ん。だ。へ。右。へ。先。程。大。原。村。の。茶。店。で。馬。を。買。て。お。手。附。を。お。出。し。よ。あ。る。時。側。に。茶。



を喫んで居りました私ハ旅商人で居坐います角ハ右始めてお目よ  
掛つて恥入ります私ハ元ハ武士でありました商人となりまして岸  
田屋宇之助と申すも私の主人が故あつて浪人をして此先の小川村よ  
住んで居りまして昨日圖らま逢ました所五十兩の金が在れば世よ出  
られるから才覺をして呉れと云へれましたが私の只今の身の上でハ  
逆も才覺ハ出来ませんから心配をして居る所へ貴所が手附をお出し  
よ成た時見た金の七八十兩ハあると思ひます誠よ押つけたお願ひで  
モか屹度御返却申すモから來年の三月まで五十金拜借ハなりませ  
いかと云へれて角右衛門ハ驚きましてそつと懐中へ手を入胴巻を押  
へながら角ハ五十兩貸して呉れと云へれば數坂越へを幾回もするが  
汝れエやうな盜賊が居るから旅人が難儀するのだサア名主へ運れて  
往くから來い宇盜賊なんのと云ふものでハ居坐いません名前までお  
明し申程で御坐いますモから御得心下さればこれから主人の所へ参り  
まして兩人で連印の上拜借しますもどうも主人を世よ出さなければ濟  
ません神掛けて御損ハ掛せませんから何卒來年の三月までお貸し下  
さい印形を捺て證文を入れませからナア申角馬鹿野郎五十兩と云  
ふ大金を汝がやらナ始めてめ逢た奴よ誰が貸す主人の爲めだの忠義だ  
かんと云やアがつて已が金へ目を着ける盜賊めサア名主へ來い往か  
ねへか。と拳を固めて右内の横面を打たから顔から火が出るやうだが  
右ア痛た。御尤もで御坐いますモが明かして願ふのでモから私の身  
體ハ主人の爲めなら十や廿打れましても厭ひません主人ハ立派な侍  
て彼様所へ置く人でハありません江戸表へ参りさへれば百石領り  
位よなるのハ造作も御坐いません主人さへ世よ出ればお金の融通も  
出来ますから最と早く御返却致しますも何卒貸しておくんなさい角  
れ汝へ已れ打たれるか右へお打ちなさい角サア此所へ來い。と聲  
を取て引寄せて甘ばかり續けて打ちましたから實よ頭の割れる程痛



いが耐へて右「それで貴所御承知から主人の所へとうか御一所も御出  
 下さい角馬鹿野郎未だ金を借りたいと云ふか名主へ連れて往の面倒  
 だから打のめしたんだ往けつたら往かねか。と云ひながら力も任せ  
 て右内の胸を蹴て横面をボーンと打たから其所へ倒れました。日比柔  
 和な右内だが餘りの事と思ひ道中差へ手を掛けて角右衛門を瞞む  
 角「汝ア脇差見たやうなものをさして居て巳を切る氣か右「ナニ切る氣  
 の御座いますてんが打たれ、バ金を貸して遣ると仰しやつたから打せ  
 たのよ。打た上土足も掛けて金も貸さそ。私も武士の祿を食んだもの。  
 見せ知らせの土民も足下も掛けられまして捨ておかれませんか。とう  
 あつても貸されませんか。と威して取らうと思ひましてビカリと引抜  
 く。刀の光りも百姓だから驚きまして。トッくと逃出したから右内の  
 跡を逢ひ驅けて往きまそと。彼の百姓の運悪く木の根へ躓いて倒れる  
 所へ右内得たりと上に乗し掛りて百姓の頬へ抜刀を差附けて右「サア  
 貸してお呉んなさい。お前さんの人を土足も掛るとい餘でいありませ  
 んか。サア貸して下さいとうあつても貸して呉れなければ據なくお前  
 さんを殺さなければなりません。サア貸して下さい。サア貸さなけ  
 れば殺しまそよ。お前さんの五兩五粒の馬を買ふやうな立派な人でい  
 ありませんか。貸して下さい貸せないかい。と責めつけられても百  
 姓の生命より金の方が欲しいと見へて。盗賊くと云ふ聲が何と響き  
 ます。誰あつても助ける者ありません。此所逢貝村の入口で西の  
 方「徳高山。東「荒山。北の方「火打山。南の方「赤城山。山又山の數坂  
 峠大樹の生茂て居まして大泉小泉と云ふ堀割の岩間も浮島の觀音と  
 いふのが在て赤松が四五本川邊へ枝を垂れ。其所も塚が在て翁の詠ん  
 だ「夏來ても皆一つ葉の一つかな。といふ碑がありまそ。此の大泉小泉の  
 堀割から堅科川と云ふ利根の水の上へドッくと岩へあつておとし  
 まそ水も移る夕日影。さしてひらめく刀劍の光り。右内の心がせきま





右内の忠  
心却て其  
身を危  
す



岸田右内

百姓角右門



そがらサア、と責めつけられ。下で、只一人殺しと云て居る。此時向ふ山を通りかゝりましたの。塩原角右衛門で、先刻右内と別れてより家に歸つて只うつと致ておりましたが、お獵りでもいらした方が宜しう御座いませうと女房の勧め、鐵砲を擔いで山狩りなりましたが、小鹿を見失つて歸る折から向の岸で盜賊と云ふ聲が、るが雜木山の林で生茂つて下へ薄暗く確と見へませんが、旅人が山賊に出逢た、違ひないから助けてやりたいと、片膝立て有合を鐵砲と玉込めいたし引き金へ手を掛けて、現在自分の家來なる忠臣岸田右内と知りませんから胸元へ狙ひをつけましたが是から如何相成りませか、後會も申上ませ

塩原多助一代記第一編終

塩原多助一代記第二編

三遊亭圓朝演述  
若林甜藏 筆記

第二回

殺忠 僕一獵夫會親族  
失愛 兒一旅婦逢知己

引續きまゐる塩原多助一代記の多助が八歳の時のお話して作座ります。彼の岸田右内は忠義の爲めとは云ひながら、心得違ひも見ず知らずの百姓が五十両懐中致して居りますと知つて無心を云ひかけますと、彼の百姓の驚きまして争ひと成り、右内の百姓の轉び上へ乗ッか、り、お主の爲め、換へられぬと嚇して五十金と奪はうとする。下では百姓が人殺しと云て居ります。往來は稀れを山村で名をおふ上野國東口の逢貝村。頃は寛延元年八月の二日、山曇りと云ふので、今まで晴天で居たのが暗くあつて、霧が顔へ掛りまして暗さは暗し。向ふ山で



へ鹽原角右衛門が山賊を打とめ旅人と助けんと。家來と知らず鐵砲の  
 狙ひと定めて。ガチリツと引金を引く拍子に。轟然と俯へ響いて。無慘や  
 右内ハ乳の上を打抜かれて。一度ひハ倒れましたが。一方ハ刀劍。一方ハ  
 草と摺んで立上り。足と爪立て身と慄はせ。ウイント云ひながらガク  
 と血を吐き出します。其血が百姓の顔へ掛りますから百姓は自分が  
 打れた心地がして人殺しくくと慄へながら云つて居る所へ鹽原  
 角右衛門が獨木橋と渡ってトックくと驅けて來ました。鹽コレサ作  
 旅人。お怪我はありませんか。角「ハイ怪我アえたかもしんね。眞赤ナ血  
 が出やした。鹽それハ私が今上の賊と打留めたに依て其血が貴君ハ掛  
 ったのたらう。夫れとも少しハ切られましたか。角「へい道理で痛くも  
 何んともあかつた。助かつたか。難有座へやす。と血塗に成た百姓が  
 仰向て見ます。と。鴨鹿の膏無し。山猫の皮と前掛にしまして。八千草の  
 笠と背負ひ。八百目の鐵砲を提げて。鹽「マアお怪我が無くって宜つたな  
 ア。角「獵夫さんで座へやすか。既ハ此奴に殺される所と助かりやした。  
 私ハ懐中ハ金のあるのを知て。跡を尾て來て取らうとするから名主へ  
 連れて往くべと思つて居た所か。既ハ殺される所でがんした。鹽「イヤ悪い  
 奴で座います。と云ひながら賊を見ると右内だから喫驚して。鹽「右内  
 ヤアノ。心得違ひとした。右内「ヤア。と。呼ぶ聲が忠義の心を通じ  
 ましたか。右内ハ漸々細き目を開て見れば。目の前に主人の顔。右内「様  
 々。と云ひながら鹽原の手ハ錠り附く。鹽「何故心得違ひをした。汝も元  
 侍士でハあいか。如何ハ落ぶれ果て食ふや食はずの身と成るともナ  
 ア。何故其様な身。量見よ成てくれた。渴しても盜泉の水と飲まず位の  
 事は心得て居るてハないか。何いふ譯で人の物を奪る氣よ成た手前と  
 は知らぬ。此ハ右衛門が旅人と助けやうとして打留めたのであるぞ。  
 コレ許してくれ。といふ。右内ハ「ハッ」と息を吐てものが云  
 ひ度か外へ出る息ばかり。漸く徳を聲と出しまして。右内「旦那様。八年ぶ



り、で主公よお目よ掛りました所彼の通り見る影も無いお身の上。作新造様からも五十金才覺して呉れど家來の私へ手をついてのお頼み。此の旅人が金を所持して居りますのを見て、主公と世よ作出し申度ばかりで心得違ひを致しました。主公のお手よ掛て死ぬのハ本望で作座います。承らく作奉公と致して作恩と戴いた作主人の妹を連れ出して逃けるやうな心得違ひと致しました右内もえ天罰主罰報ひ來たつて只今此所で旦那様のお手に掛て死ぬのはあたりまへて作座います。江戸表よ残た女房おかめと未た年のいかな娘が此事を聞きましたら、嘸歎きませうが、決して盜賊をして殺されたのでない。旦那様を江戸表へお連れ申度と思ふ心得で期様ナ事と致しましたと云ふ事を旦那様から仰聞られて下されませ。ア、最う目が見えん此世のお別れ。と云ひながらバタリと倒れましたから塩原も思はせ聲が出まして、塩ア、不便な事を志た。家内が聞たら嘸歎くであらう。許して呉れど歎くの百姓が聞て居て。ホロリと泣き出しました。角とんだ事となりました。ア、金と貸せば宜かつた。道理で主人の爲めよ金が入るだ主人も私も印形と捺て證文も張るからつて。名前まで明かした。がよもや虚言だと思ふから貸さなかつたツケ。鹽、ハイ全く私共の家來で作座いまして手前と世よ出し度ばかりで此の様な事と致しました何卒作勘辨と願ひます。角、作勘辨所じやねへ鐵砲を打たせりやア乃公が殺される所た。何んとそう云ふ良家來と鐵砲で打たら嘸悲しかんべ。鹽、貴君も不便と思召ならば此遺體ハ拙者一人で持まいる事は出来ませんが。此處に細索が在りますからみれで括げて吊りまして銃砲のさし荷ひて。一方擔いで呉れませんか。角、ハア擔ぎます。と泣く。擔いで小川手前まで歸て來ました。家でハお清ハ角右衛門の歸りか遅ひから案じて居ります所へ、鹽、今歸つたヨ。清、お親父様かお歸りだよ。オヤ、良人お一人でいけあいからお手傳ひが入りましたか。猪でも打ちましたか。

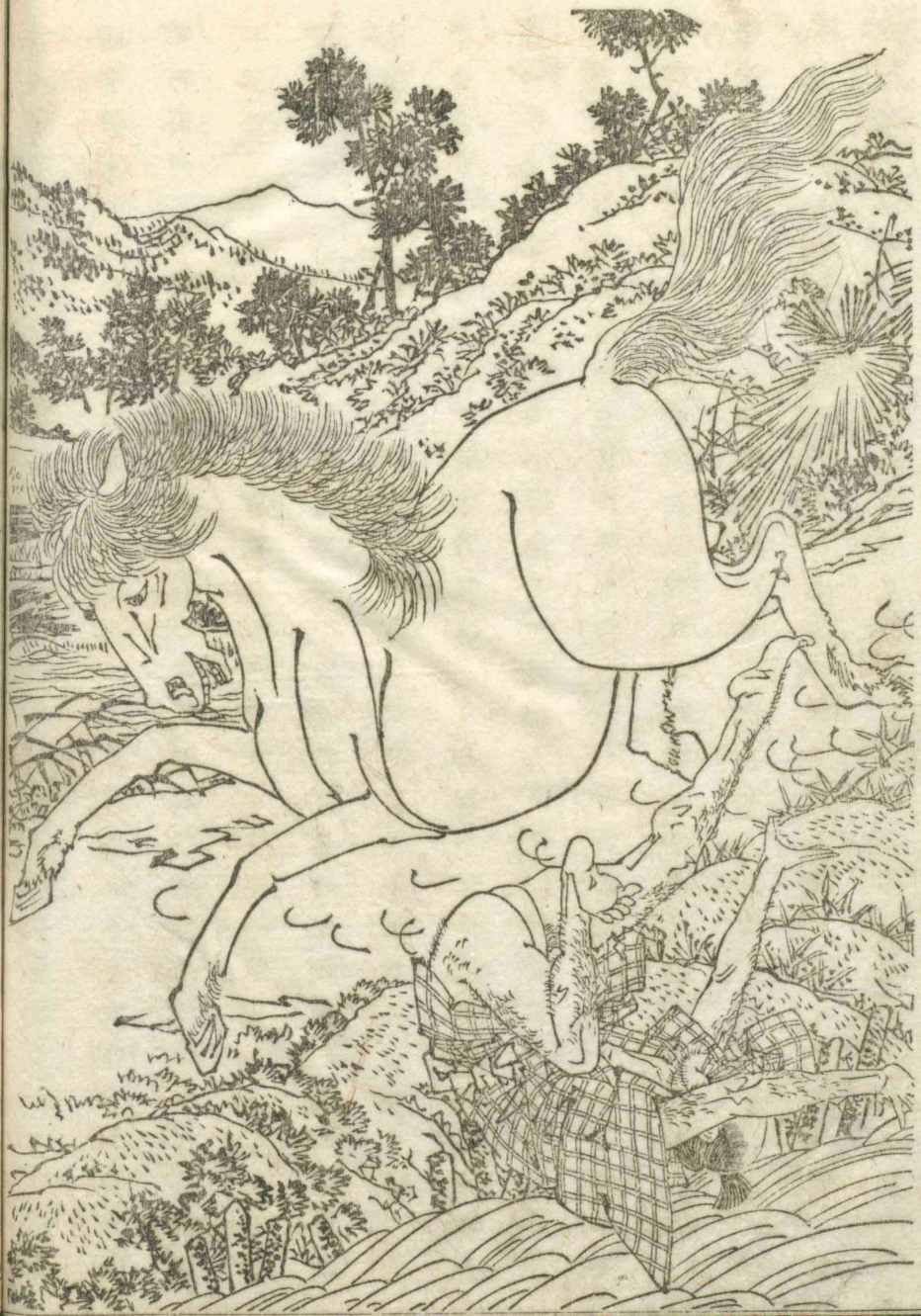


鹽「イヤ飛んだ物を打ちました。お前か聞たら嘸驚くだらう。話しをする  
 からマア貴君此方へお上り。と百姓を上へあげ。これくの譯たを話し  
 をして鹽「おせい間違ひと云ひながら今朝別れた右内と銃砲で打う  
 とハ思はなかつた。清「何處も居ります。と云ふから簞笠と反除けまする  
 と。情けあひ死状。清「ア、今朝お前も別れる時。金さへあれば旦那様が元  
 の武士よあられると無理を事を頼んたから私共兩人を世も出し度バ  
 かりで。非業を死とさせたのも妾の酷く頼んたから心得違ひとしたの  
 たらう。良人何して人と獸と間違へました。鹽「イヤ、エ獸と間違へて打た  
 のではありませぬ。此の方よ係た山賊と心得て打たのた。泣く所じやあ  
 い。お詫ひ言を申せ。清「ハイ、く悲しいのよ取紛れ作挨拶も申せぬ。あ  
 れハ家來とハ申なから私共の妹と女房よして居りますから家來と申  
 ても弟と同じ事跡よハ七歳になる子もありません。して不便なもので作座  
 います。何卒忠義ゆゑと思召まして作勘辨なされて下さいまし。角「私も  
 斯いふ事になるんなら話し合ひましたものと。打擲るべえと思つたら  
 此様な事に成て仕舞て誠よ氣の毒だ多。お親父様あんで叔父さんを銃  
 砲で打たかあ。江戸に居る叔母さんだの。おゑいと云ふ従弟が聞たら。  
 どんなよ怒むか知れぬへから。若し叔母様が來たら多助が間違ひて打  
 たと云ふから家尊ハ殺さぬへふりをするか宜。鹽「ア、宜い。小兒  
 よまで苦勞を掛けて濟まない。角「誠に年はいかねへが。へエ八歳位も  
 んで。へエ實のなる木は花から違ふつて。貴君侍士で居せへやすナ。鹽  
 「取紛れまして未だ名前も申上ません。手前は鹽原角右衛門と申ます。浪  
 士で角「イヤサ私が鹽原角右衛門と云ふ百姓サ。鹽「へー私か角「貴君何時  
 から鹽原角右衛門と云ひやす。鹽「何時からと云て先祖から角「乃公が名  
 前も先祖から鹽「手前の先祖は下野の國鹽谷郡鹽原村の郷士鹽原角衛  
 門と云ふ事か書類も残つて居ります。が精しくも調べては見ません。角  
 「私が先祖も野州鹽谷郡鹽原村で。沼田へ來て鉄一ツから今でハ田地や



山も持て居りやすが。うれじやア貴君も元と洗へば同じ血統で。鹽妙な  
縁ですなア。角縁ハ縁だが此様を事よ成てハ惡縁だね。サア此所に金  
が五十兩あるがらみれで身形と整へて立派なお侍士よ成て下せへ鹽  
「何う致しまして見ず知らずの貴君に頂戴する事ハ出来ません。角ダッ  
テ元と洗へば同じ血統じやないか。鹽左様でハ座座々すが大金と戴  
く譯はありませぬ。角戴かねへッて云ふが貴君か銃砲と打たなければ  
己ア命を取られて金も取られてしまふのだ。それを助かつたのだから  
貰つて下せへ。貴君此金で江戸へ歸らねへど此の右内どのが犬死よな  
りやす。命と捨てても主人と助けてへと云ふのだから此事が世間へ知れ  
せへしおけりやアい、のた貰て早く作屋敷へ歸て下せへ。鹽イェく家  
來が悪い事を致したのだから手討ちよしても宜しいので。角それでハ  
五十兩で貴君の大事を物と買て往さやすべ。鹽ハイ左様でせうが四  
年前の山水で大事なものハ皆流されて仕舞て何もありません。角ふり  
やア貴君の悴でせう。ふれを私よ下さい。鹽何う致しましてこれハ一人  
の悴ですからいけません。角お前方ハ年が若へから未だいくらも子が  
出来るヨ。己ア四十二歳もあるが未よ子がねへから此様子と貰て往け  
バみんな難有事はねへ。清これハどう致して上られませぬ。角鹽原の子  
と鹽原が貰ふのだから宜じやないか。鹽上げられませぬ。清そんな事を  
仰しやいませぬ。家來よ無心を申たのも此悴と世よ出したいからで座  
います。どう致しまして出来ませぬ。角よく考へて作覽なせへ。貴君が江  
戸へ往て此家來と此地へ埋めて。江戸から此數坂峠と越して追善供養  
をしに來る事は出来やアしねへ。私が此子を貰て往けば。私ハ沼田の下  
新田。此所までは半日で來られるから墓參とさせて追善供養もしよう  
じやないか。私ハ三百石も田地があり山もあり不自由ハさせねへから。  
殊には此子の爲めよハ叔父さんよ當ると云ふだから子のねへ。昔日と  
諦めて下せへ。鹽成程面白事を云ふ信切な方だ。宜しい上げませう。清





塩原の英雄  
能く駿馬を  
駐む

塩原妻おせり



塩原角右門

百姓角右門



「何を仰います。多助を遣て良人どうあさいませへ。鹽宜しい黙止て居ろ。コレく多助此處へ來い。と云ふと多助ハいと云つて。愛らしい紅葉のやうな手をついて其處へ坐わる。鹽コレく手前ハ私の眞實の子でハあ。此沼田のお百姓の子だ乳があのので、藪の上から預つて養育て呉れとの作頼みもある。八歳まで育てたから。最下新田とやらへ歸つて。角右衛門様作兩親も孝行を盡せ。而して此の死んだ叔父さんの追善供養としろ。よいか解つたか。其お前を育てた禮として五十兩を下すつた。此金子で私が身形を整へて江戸の屋敷へ歸るから。ようく解たか。多アイ毎時でも母上さんが私を抱て寝て居て。嚴父さんが金があれば江戸の作屋敷へ歸へれると云ふから。ア、金が欲しいと思つても仕様がねへから。豚兒が今も成長あれバ稼いで上げべえと思つて居た。それがじやアいやたけれど。此の下新田の叔父さんの子の積りで往やすべえ。角ア、何んでも知てるから。いけねへ。どうか聞きわけて呉れ。鹽能く聞きわけて呉れた。清お前も母さんが毎晩愚痴を云たのと能く聞きわけてお呉れた。お前も悪戯や何かすると不孝もありませす。ヨ妾共ハないものとお思。ヨ角難有それではお壯健で。又此地の田舎の親父さんの家の方へも來て逢ふ事かありやすべえ。鹽イヤ屋敷奉公とすると便か出來ん。殊よお前の爲めならんから。コリヤ多助此の親ハ假の親と心得て沼田の尊父さんに孝行としろ。多ハイく孝行としますから早くお屋敷へ作歸り成さいますと云へれてお清は堪えかねて泣きながら清「寝ますと踏脱きませずから氣を注けて下さるやうよ。どうか作目よか、りませぬが作家内様も宜しく作面倒と願ひます。角アアよ心配するよハ及ひやせん。ふれから祝ひに酒肴で親類固めよ。佛の通夜と酒宴として翌日三日の朝。村の倉田平四郎といふ名主へ届けと志て百姓角右衛門が多助と十文字よ脊負まして夫婦は須賀川まで送て來まして夫婦ハ「どうか道をお厭ひなすつて。角へ道ハ氣を注けるから大丈夫でん

「何を仰います。多助を遣て良人どうあさいませへ。鹽宜しい黙止て居ろ。コレく多助此處へ來い。と云ふと多助ハいと云つて。愛らしい紅葉のやうな手をついて其處へ坐わる。鹽コレく手前ハ私の眞實の子でハあ。此沼田のお百姓の子だ乳があのので、藪の上から預つて養育て呉れとの作頼みもある。八歳まで育てたから。最下新田とやらへ歸つて。角右衛門様作兩親も孝行を盡せ。而して此の死んだ叔父さんの追善供養としろ。よいか解つたか。其お前を育てた禮として五十兩を下すつた。此金子で私が身形を整へて江戸の屋敷へ歸るから。ようく解たか。多アイ毎時でも母上さんが私を抱て寝て居て。嚴父さんが金があれば江戸の作屋敷へ歸へれると云ふから。ア、金が欲しいと思つても仕様がねへから。豚兒が今も成長あれバ稼いで上げべえと思つて居た。それがじやアいやたけれど。此の下新田の叔父さんの子の積りで往やすべえ。角ア、何んでも知てるから。いけねへ。どうか聞きわけて呉れ。鹽能く聞きわけて呉れた。清お前も母さんが毎晩愚痴を云たのと能く聞きわけてお呉れた。お前も悪戯や何かすると不孝もありませす。ヨ妾共ハないものとお思。ヨ角難有それではお壯健で。又此地の田舎の親父さんの家の方へも來て逢ふ事かありやすべえ。鹽イヤ屋敷奉公とすると便か出來ん。殊よお前の爲めならんから。コリヤ多助此の親ハ假の親と心得て沼田の尊父さんに孝行としろ。多ハイく孝行としますから早くお屋敷へ作歸り成さいますと云へれてお清は堪えかねて泣きながら清「寝ますと踏脱きませずから氣を注けて下さるやうよ。どうか作目よか、りませぬが作家内様も宜しく作面倒と願ひます。角アアよ心配するよハ及ひやせん。ふれから祝ひに酒肴で親類固めよ。佛の通夜と酒宴として翌日三日の朝。村の倉田平四郎といふ名主へ届けと志て百姓角右衛門が多助と十文字よ脊負まして夫婦は須賀川まで送て來まして夫婦ハ「どうか道をお厭ひなすつて。角へ道ハ氣を注けるから大丈夫でん



す。どうか屋敷へ歸つて奉公とあされたら便と聞せて下さい。鹽原無音勝で座いますから何分願ひます。多助父上さん。母上さん。壯健で屋敷へお歸んなせへ。と後ろ身も成て此方を伸ひ上て見る。鹽原夫婦も見送りく泣く泣く歸り掛ります。向ふからワい。といふ聲で大勢驅けて来る其先へ真しくら驅けて来たの青馬で、荒れ荒れてトツくと来ます。此道は左右が谷川で一騎打で何處へ往く事も出来ません。ア、此子に怪我とさせては濟まない。氣をもんで居ると見るよ。浪人鹽原角右衛門が馬の前へ仁王立も成つて馬の轡と押へて百姓も渡そと幸ひ此馬へ角右衛門が買はうと云た馬だから直ぐ馬と受取て。多助と馬も乗せて沼田の下新田へ参ります。浪人鹽原角右衛門から恵まれた金で支度と整へ名主の所へ別れを告げに参ります。名主も名残りが惜いからお立ち祝ひとしたいと云ふので、村で鹽原に劍術を教へて貰つた者もあります。九月の三日まで留められました。お

れか鹽原多助の生育で座います。扱お説話替て江戸表も居ります。お龜は娘おゑいが毎日作親父様は未だ歸りませんかと云はれるので、おかめも案じて居ります。と塚屋傳吉が歸つて来ます。宇之助さんは上州の小川村で知人へ逢つて別れて。私は沼田の大竹屋へ待つ居たが、いので。何時までも馬鹿り。と待ても居られぬから歸つて来たが。未だ宇之助さんへ歸らないかと云はれたので、種々心配して。神籤を取たり。賣卜者も見て貰ひ。杯したに分らない。殊も借財方から買められて。逆も身代が持切れませんから身代を仕舞まして。七歳なるおゑいを十文字も脊負まして。心當りを尋ねやうと出立しました。は九月の三日。唯上州小川村と聞たばかりで女の獨り旅で座ります。から馬士や雲助杯の人の悪い奴も挑かはれ心細くも漸々の事で中仙道の大宮宿泊り。翌四日ハ鴻巣の田本が中食です。例の旅費が乏しいから勿論駕籠なんぞを雇ふ事は出来ず。馬と雇ふ位ですが。夫れも十分よ。往きません。漸



々日本で中食を誂へて居ると。側も居る客の年齢四十一二もある女で。  
衣裳の小辨慶の衣物も細かい縞の半纏を着て居る。商人体のお神さん。  
今一人は息子か供か。年齢廿一二なる商人体の人品のい、男で細  
縞の脚半甲掛も旅馴れた様子で。頻り中食をして居りますと。男母上  
さん。い、お子で作坐いますねへ女「ア、い、お子だねへ。モシエお神さ  
ん。貴婦のお娘子で作座いますか。龜ハイ左様で作座います。女「幾歳にあ  
ります。エ。龜ハイ七歳で作座います。女「貴婦の何處へお出です。龜「上  
州小川村まで参りますので。小川村といふと何處へお出ましたら宜  
うございませう。男「小川村と云ふのは上州も東口とやら。山國と聞まし  
たが大層遠方へお出でございませうねへ女「お前さんの江戸辭のやうで  
すが。何の作で小川村へお出なあります。龜「ハイ妾の匹偶が小川村に  
居まして夫へ参りますが。誠に旅馴せんから困ります。女「左様ですか。私共  
は前橋も居りますが。元の中橋で生まれて江戸生で作座いますから前橋  
でこへ寂くつていけません。そんな山の中へお出な成の一人  
で。嗚ッア作心細いでせう。婦さん此處へお出で。人見知りとしおい子です  
から。叔母さん顔を横よして云ふから女「サア此お着とお喚り。龜「あ  
れさいけないヨ。何人様の所へでも構はなわがつて困ります。女「妾は子  
煩悩ですが子と云ふのは此忤計で。女の子のどうも可愛らしくつて。サア  
之をお喚と彼是云ふ内よ。直よ馴染まして。取附たり。引附たりするから。  
どうせ熊谷へ泊る積で。松坂屋と云ふか宜う作座いますから其家へ泊  
りませう。貴婦にお草臥でせうから妾が背負て上げませう。と云ふので  
お龜も一人旅で連れが出来たから心嬉しく思て居りますと。最う悉皆  
ろのお神さん馴染んで。お神さんと一所に寝なければ聞かない。今夜  
は妾が抱て寝ますヨ。と云ふので神さんが抱て寝て翌日出立しました  
前よへ熊谷より前橋へ出ますよ。本庄宿の手前に作堂阪と申所より。  
檜木戸村から八丁川岸。それより。五料と申所より。日光一の關所が作座い



まも。當今馬車道と成りましたが其頃ハ女ハ手形がなければ通られぬ  
とて。久下村より中瀬に出て。渡しと越て。漸々堺と云いふ所まで來ます  
と。七つ下りになりまして。足が勞れて歩行かれませぬ。女何うしやう伊  
勢崎まで往やうかね。男母上さん此邊ハい。宿屋があいら伊勢崎  
の錢屋へ泊りませう。女さうしやう而してお神さんも勞れて居るから  
駕籠を。アレサどうせ私共が乗るんで。それから宜しう座います。と云て  
居る中。男が暫く經て馬を一疋駕籠と一挺頼んで來ました。男母上さ  
ん。駕籠ハ一挺。何かありませんか。お神さんハ馬に乗り附けますまい  
から。お神さんを駕籠に乘せて。母上さんは馬でお出なさい。女それじゃ  
アさうしやう。お前は。お母さんとお駕籠へお乗りヨ。子。イ。エ。私しや叔  
母さんと一所でなく。ツちやいや。龜あれきア聞きわけのない事ばかり  
女。了れで。仕方がないから。少しの間。氣味が悪くも乗つて。後覽なさい  
な。馬は乗つて見ろ。人よハ添て見ろ。と云ふ。ふと。が。あり。ます。す。り。ら。龜ハ  
イ。乗つて見ませう。と。あ。わ。く。乗りますと。乘り付けませんで。ふと  
よ。道中馬ハ危あ。い。から。油汗が出て。確かりつかまつて居る。シャン  
く。と。馬方が。曳き出。れ。から。百々村へ。出。ま。し。て。與久村から。保泉村  
へ。掛。ま。す。と。駕籠より。馬の方が。余程。後。れ。ま。し。た。から。心ハ。焦。け。ど。馬ハ。緩  
く。跡より。來。る。男ハ。遅。く。姿ハ。見。へ。ま。せ。ん。其。う。ち。雜木山が。あり。ま。し。て。左  
右から。生。茂。り。て。薄。暗。い。所へ。往。き。ま。す。と。馬士が。立。留。つ。て。馬。貴。婦。此。處。か  
ら。下。り。て。下。さい。龜。此。處。から。下。り。ち。や。ア。し。や。う。が。な。い。ヨ。伊。勢。崎。の。錢。屋  
まで。往。く。の。じ。や。な。い。か。馬。私ハ。與久村の。者。だ。から。駄。賃。より。出。越。し。て。來  
た。ん。だ。か。ら。此。所。で。下。り。て。下。せ。へ。龜。妾ハ。始。め。て。困。る。から。跡。から。兄。さ  
んの。來。る。ま。で。待。て。お。呉。ん。さ。い。馬。い。け。ぬ。へ。か。ら。下。り。て。お。呉。ん。さ。い。  
と。云。ひ。あ。が。ら。無。理。よ。龜。の。腰。と。押。へ。て。引。き。ず。り。下。り。て。仕。舞。ひ。ま。し。た。  
お。龜。ハ。道。中。馴。れ。な。い。から。龜。何。を。す。る。ん。だ。と。云。つ。て。も。仕。舞。が。な。い。其。中。馬  
方ハ。シ。ヤ。ン。く。と。馬。と。曳。て。往。て。仕。舞。ひ。ま。し。た。から。龜。誠。よ。道。中。の。馬。士





敵右工門おつめ  
の危急を救ふ



右内妻おつめ

百姓角左門

源氏物語  
卷之六  
十一

源氏物語  
卷之六  
十一

源氏物語  
卷之六  
十一

源氏物語  
卷之六  
十一



と云ふものゝ悪いものだ。ア、彼の兄さんへどうしたらうと恠々して居るど。雜木山から草を踏んで来た惡漢が物をも云はず掴まへるから。アレーと云ふ内よ一人が足を縛へ。一人か手と縛へ。擔いで行きませ所へ通り掛りましたの。沼田下新田の角右衛門で。木崎から歸り道。暗さは暗し分らないから。惡漢に突き當ると。おかめと擔いだなり倒れました。角右衛門の見るど女と擔いで居るから此奴は盜賊だあと。突然拳骨で打ますと。百姓で力があるから痛い。疼くないの。惡漢ハ驚いて逃げ出しました。角お神さん。怪我はありませんか。ハハ誠ニ難有座座座。女一人で居ますからどうも苛い目逢ふ所で。お蔭様で助かりました。角全体貴婦人何處へ。お出よあるんで女伊勢崎の錢屋へ参ります。角私も錢屋へ往くんだから一所に往う。お前さんお一人かへ女先へ娘が参つて居ます。角何しろ一所に往きなさい。これから伊勢崎へ来て。錢屋へ往くと。左様な娘さんと連れて来たお客ありませんと。

云ふから萬一宿屋の名前でも違ひはしないかと。外の宿屋と搜しても知れない。角右衛門ハコリヤア此のね神さんハ惡漢の爲め娘を略取されハしあいかと思しゆ。角お神さん娘子さんハ標致ハ宜かへ。フワン親だから能く見へるだらうが。七歳とはいひあから略取と云ふものがあるから。見す知らずの子と可愛がるのハ了簡が在て略取したのてはねへかと思つてサ。女ハイ妾の良人が歸ませんから尋て参りますので。在りますが。假令夫と廻り逢ひましても一人の娘と略取されまして。何れも良人は濟ません。何處の何方か存ませんが。娘と取返そ事ハ出来ませいか。角取戻そ事も何も出来ねへが。お前さんハ何處の者だい。女妾ハ江戸の本郷春木町に居ります。旅商人の岸田宇之助と申すの。女房で居坐います。角エ、それじやアお前は鹽原角右衛門と云ふお士の妹で。其家來の岸田右内さんのお神さんで。おかめさんと云やんずかへ。女どうして存じませぬ。角どうしてッて最う魂消た。實ハ不思議



議な縁サ。併シア。氣の毒な事たか貴婦の尊兄角右衛門様と云ふ人ハ  
小川村に浪人して居るだ。云ねれて驚き女貴君どうしてそれを作  
存じて作座います。角兄さんよも作亭主にも私逢せやせうが未だ兄  
さんハ支度も出来めへがら逢はして上げやすべえ。心配しぬへがやう  
がんです。云ひましたけれど沼田の角右衛門ハ夫れてハ良人が非業  
に死だ事も知らず子供を連れて来る道で娘を略取されるとハ氣の毒  
な事とおかめと不便と思ひまして。みれから娘と略取された事と其地  
の名主よか、り八州様へ願て手配して貰ひ。おかめハ計らず下新田の  
角右衛門の世話よありますと云ふお話しハ次回ハ申上ませう

鹽原多助一代記第二編終

鹽原多助一代記第三編

三遊亭圓朝演述  
若林柑歳 筆記  
酒井昇造 助筆

第三回

宴婦陵ノ命農角偏説レ運  
兇漢誤レ事士角幸免レ厄

沼田下新田の百姓角右衛門と私用がありまして木崎まで参て歸りが  
け。保泉村と云ふ所で計らずも岸田右内の妻おかめの災難を助け。信切  
に世話をして。身の上話を聞くと。これくといふから。ア、不便なも  
のだ小川村で非業な死と遂げた。岸田右内の妻か。殊よそ夫を尋ねて來  
る途で。娘迄畧取されぬか。如何も氣の毒な事と心得ましたから直ぐ  
よ伊勢崎の名主へ掛り八州へ願て。其惡漢をゆるくと捜しました所  
が。三日程経まして縛られて参りました兇漢三人は。百々村の倉八と。太



田の金山の松五郎。今一人は江田村の源藏で。段々お調べよあると。其者の  
共の申口よ。旅稼ぎの親子連れのも乃小金を三兩宛賞て頼まれたので。  
何と申すの其者の名は知れませんと云ふのでいろくお調べよ成た  
が。親子連れの旅人の更へ行衛が分りませぬも茲三人の悪漢は江戸表  
へ送らましました。れめと角右衛門は日數が長く掛りまして伊勢崎よ  
長くも居られませぬ。角右衛門が。私沼田の下新田此者で。れ前の  
兄さんよも逢してや。私の家へ來なさい。いふので。一所に下新  
田へ連れ歸りまえたが。五日程掛りましたから。下新田の角右衛門の宅  
では餘り主人の歸り遅いゆへ案じくらし居ります所へ角今歸つた  
ヨ妻「オヤ良人マア此んなよ遅くなる譯ねへが何處へ行きやんした  
角少し譯へあつて。飛んでも此へ間違が出来て此方の災難見たやうな  
譯でハア大きに日數も掛ふから案じて居べエ。思て居たが手紙も出  
さ。此へでハアどうも妻さうでが。んすか。多助も父様が歸ら。此へ切て心  
配して。五八も案じて居るし。村でも心配して見舞ふ來やす。何にも  
追剥又逢ふ筈の此へ。久しぶりで行たんだから木崎の親類で留めら  
れて居るんだ。んべいつて云て居やんした。五八我へ其所と片付て。盟と  
わけろ。戸口よ立て居りやんすのは誰だ。と見ますと。年輪之廿四五で。標  
致はよし。愛嬌のある婦人で御座います。から妻貴女此處へお掛けなせ  
へ。お連れじやありやんせん。角「ア、これの巳が伊勢崎で合宿に成  
た神さんヨ妻「アイー。うめ。誠よ不思議な御縁で此度。此方の旦那様  
に助けられました。行き所もない身の上で。不哀そうだと仰つてお連れ  
下さいました。もので御座います。どうか行末長くお目と掛けられまし  
て下さいまし。女房のハイと云たが見訓ぬ女。殊よ姿と云ひ。言詞遣ひと  
云ひ。近所の者でないから。妻旦那さん何所から此方と連れて來やんし  
た。角「巳れが保泉村を通りあけて。此神さんの難儀と助けたから。餘儀な  
く。此神さんの事よ掛つて泊つて居るやうな譯で。五日錢屋へ逗留して

江戸見聞記 代官 二  
二  
速記法研究會



居たのヨ妻へ一此神さんと一所お錢屋へ逗留して居て。一。さうどの  
 知ら糸へで家じやア案じて居たのよ錢屋へ泊つて此様お美しい神さ  
 んと五日も逗留して娛んで居たんでがんすが。良人マア幾歳にゐるだ  
 か角馬鹿ア云へ。此神さんよ災難があつて伊勢崎の名主へ掛つて八州  
 様へ頼んで居たのだ妻八州様へ頼んだら。お女郎屋へ頼んだら。知ん糸  
 へが五日錢屋へ泊りて居れば知れたもんだ。ハアだめな。家じやア案じ  
 て居るものと。そりよう家と五日も明けて。よくのめくど歸られた義  
 理だ。マア角那云ふ事といふ。マアね神さん心配し糸へがいく。仕様の  
 糸へ婆だ四十面をさげて飛んだ事をいやアがつて。マア貴女心配し糸  
 へがようがんす。望云て少しも譯をおめあも云わす。又女房も云ハ  
 な。のられたの先は居苦う御座いま。四五日經つ中雪が降りまして。道  
 が絶へて仕舞ひましたから角右衛門はれかめを小川村へ連れて往つて  
 鹽原角右衛門は逢せたいと思つても連れて往く事が出来ませんので。其

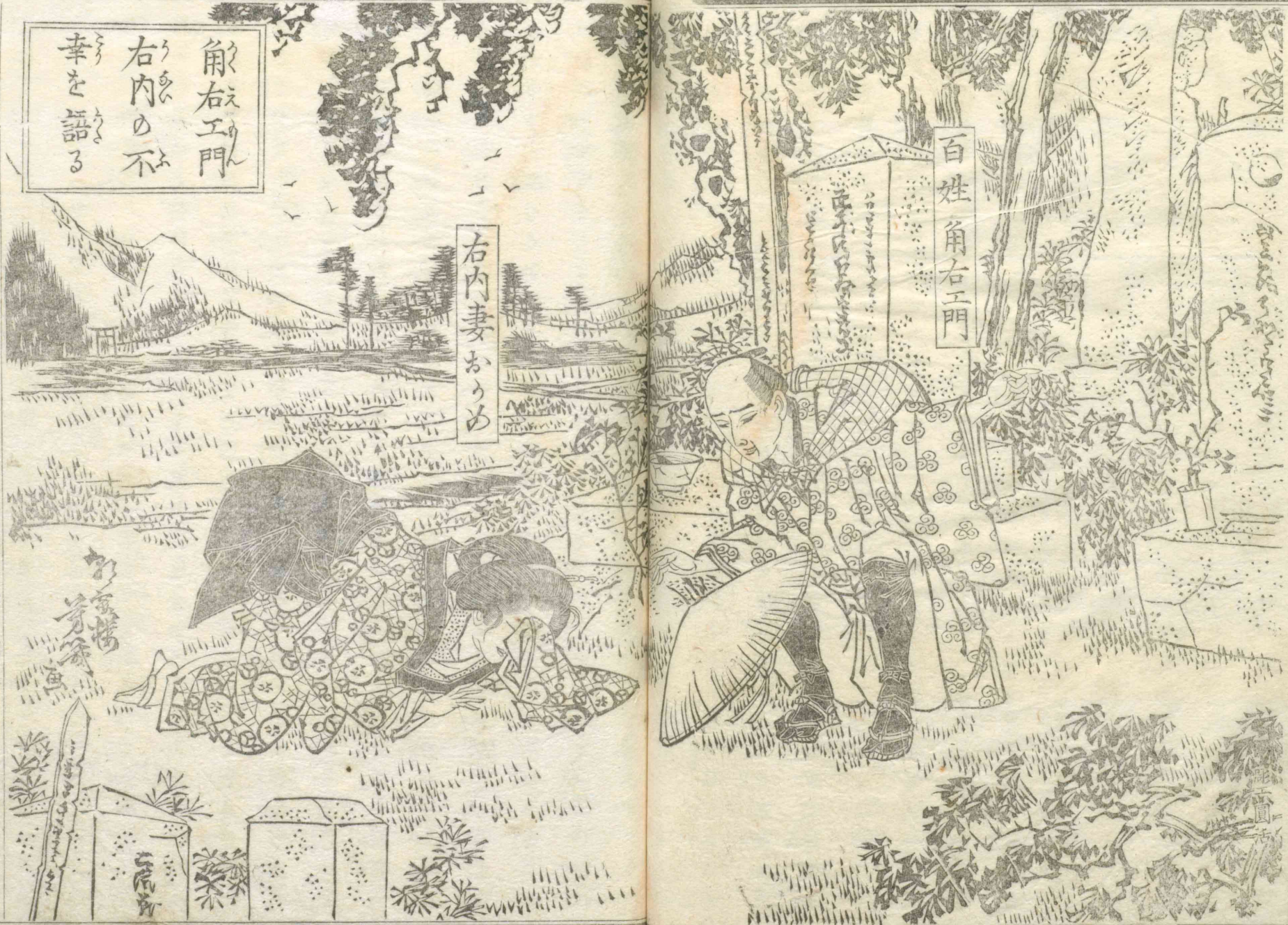
年も暮れて翌年寛延二年三月よなりまして。角右衛門のれかめを連れ  
 て小川村の鹽原の所へ尋糸て往きますと。鹽原は去年九月の三日よ此  
 村と出立したと云ふ。ア、それでは直ぐ支度として立た事いと  
 思ひ。角右衛門も仕方ない。岸田右内の墓場へ参りますと。未だ新  
 しい卒塔婆が立まして。村の者が手向ますか。香花はたへす。上げてあ  
 りませ。其石塔の前へ参りまして。角モシお神さん此處へ來なせへ。れ前  
 の御亭主お逢せてやる。ら此處へ御出なんしよ。か誠よ不思議を御縁  
 で貴君がお助け下さつて今年まで御厄介よ成て居りましたが。兄も江  
 戸表へ出立しましよ。どの事です。妻の夫岸田屋宇之助は此村に居り  
 ますか。角ハイ。これがお前の御亭主でがんす。かハイ。何處よ居ります。角  
 「其處に徹巖忠操信士と書てゐる。之がおめへの亭主サ。カエー。それで  
 妻の亭主はアノなくなりましたのですか。角譯といふのも氣の毒だ。か  
 ら今まで云なかつたが云なけりやア。分ら糸へら云ふべえ。去年



魚右工門  
右内の不  
幸を語る

右内妻おりめ

百姓角右工門



鹽原多助一代記第三編

四

越記法研究會

鹽原多助一代記第三編

越記法研究會



九月の二日。わしが用がわつて金と持て千鳥村まで往くとあんなの御亭主が跡から来て。モシ旅人さん〜といふからハイと云て振りけへると。私が主人の爲めに五十兩入るだから貸して呉れ。主人が江戸へ歸へれる。損と掛け糸へら貸して呉れると手をついての頼みだが。見す知らずの者に其様ナ事を云ふのだら盗賊だと思つて打ち撲るべゑと思つたらお前の御亭主が脇差と扱て追驅る時に私が轉倒だ上へ跨つて。殺さばとすから一生懸命よ。人殺しい〜と云ふと。其時向ふ山を通り掛けたの。貴女の兄さんで。鹿ア打道した歸る路で。私等と見て盜賊か旅人掛つたのだと思つて。鉄炮と撃つと其玉が宇之助さんの胸へ當つて。現在自分の家來と知らず。兄さんが鉄炮で打たと云て。オイ〜泣やんすから私も氣の毒になつて。死骸を小川村へ送つて。身の上話致すと。貴女の兄さんも私も元は先祖が〜一人の沼田へ出て百姓になり。一人の阿部様の家來に成て。又此處で巡り逢ふとハア實に驚いた譯で。不思議な縁でがんすから。私が五十兩遣るべゑと云た處が。受け糸へと云から。どうしたらよんべいと思つて。岸田が犬死に成て可哀そうだら。獨子息と無理無体よ。貰て來たのが。家も居る多助サ。貴婦の爲めに。甥でがんす。其處へ又貴婦と私が助けて家へ連れて來て見れば。叔母甥が斯う遣て。一つ所に來て委しい話しとす。云ふのは前世からの約束と諒めて。貴女も御亭主さんの死んだ事は何時までも鬱とと思つて居て。身体でも障るといけねへから諦めておくんちんし。誠よさう云ふこと。しらす。連れの者が先へ歸て來ても良人での歸つて來ませんから。何うした譯かと案じて居りました。田舎での其地も長らく居りますと。養子よと云ふ事を聞きました。良人も外へ養子よでも往たのではない。女房子を振捨て他家へ養子よといると。あんまり情ない不實な人と怨んで居たのは。妾の誤り。良人が左様いふ譯に成まして。唯一人の兒女を畧取されまして。生甲



斐のない身の上寧そ一思ひも死よどらおざいますから先刻來る道よ  
 ありました谷川へ身と抛げて死ますのら。貴君のれ先へれ歸り下さい  
 ましと泣倒れますから角、そんな馬鹿な言と云ふもんじや糸へ。貴婦の  
 娘は畧取されても死だの生きて居るの知ん糸へのだのら。夫よりも私  
 が家へ歸れて多助を兩人で娘の行衛と捜え。私も亦捜えて遣から。手分  
 をして尋たらおゑいさんとやらおも逢へ糸へと云譯もねへから。今早  
 まつて命と捨るよりも生きて居て死んだ字之助さんの菩提と吊ふのは  
 貴婦と多助ばかりだ。何卒私の云ふ言と聞て下さい。ようくと云われ  
 ておのめい。ハイくとばありで泣て居ました。角右衛門の辭も捨る  
 糸て是非なく兩人で沼田へ歸つて參ました。が。扱頭兩岐お分れまし  
 て。鹽原角右衛門の其前年の九月の三日に小川村と出立致しまして。沼  
 田此御城下泊りまして。翌日の前橋泊り。其翌日が熊ヶ谷泊りで。そ  
 れあら鴻の巢桶川と中仙道と下りました。が。足弱の連れで道も捲取り  
 ませんで天神橋へ掛ります。日ハトツブリ暮れ。足の疲れましたか  
 ら御新造の歩行けませんのら。馬屋と云ふ茶屋へ寄りました。鹽誠に困  
 るも乃だあ。足の痛むのナ。清へイ幾ら薬と付けても癒りませんので  
 困ります。鹽誠お草鞋喰と云ふものは悪いもので。其癖山道の歩行  
 つけて居たが平地の却て草臥るといふののせういふものだらう。これ  
 く女中これのら大宮宿までは幾程あるナ。女中これから一里四町あり  
 やすがハア日は暮て御困りでがんせう。鹽當家では泊めて呉れまいの  
 ナ。女中愛な宅でわハア堅う御座へや。及からせん。お馴染の御客でも泊め  
 まし糸へから三味線や藝はいりやし糸へヨ。私ども堅へ家でなくつ  
 ちやア勤りまし糸へ。其代りよやアこゝな家は忙がしくて庭の中と一  
 日に十里位の道は歩行から夜は草臥て顛倒て仕舞ふのサ。それから見  
 ると熊ヶ谷の女共は絹布衣物を着て居て樂ナ代りよ此家へ來ると三  
 日も勤りやせんでハア誠とどうも何も御座へやせん。玉子焼と納汁お



生節豆腐でハア、盥よし、何でもいゝから早く。と云ので此家で支度  
 と致去まして、盥コレ、女中勘定としてお呉れ。コレお清此包とれ前  
 持て往てお呉れ。之の端錢で出して置からこれの私が持て往くと。云ひ  
 ながら荷と分けて居りますと。側に居た年齢廿二三で半合羽と着て居  
 る商人体の男が草鞋の襪たのと穿いて。頬冠りしながら此男も出に  
 掛りまはど。いさなり傍あめいた角右衛門の風呂敷包と引攪て逃げま  
 した。あら、角右衛門の驚きまして盗賊待と云ひながら追驅けました。  
 彼は一町餘りも追驅けて加茂宮村と云ふ所から西へ切れて加村まで  
 三町計り追驅けました。盥原の最の間合ひませんから。脇差にあつた  
 小柄とズット抜いて手裏剣と打ますと。打人は名にれふ盥原角右衛門  
 の腕前でそこから狙ひ違ふ。悪漢の右の太股へ立ました。アツと云て  
 畑へ倒ました所と。角右衛門と悪漢の頭髪と取て引倒し、盥ヤイ盗人。旅  
 中の事ゆへ助けて遣まいも乃でもないが。包とよこせ。悪ハイ、貧の

盗みで御座いますと。うか命計と助けて下さい。盥黙れ貧の盗みだ杯と  
 申て左様お事又欺されるやうなものではない。今度の免して遣りす  
 以後たしなむか。と云ながら。側あつた榎の根株へ頬片と擦り付ます  
 から悪漢の痛くて堪りません。悪、どうか御勘辨と願ひます。盗賊で御  
 座いませぬ。實の私の母が眼病で難澁して居ります。それと七歳になる  
 妹が御座いまして生計に差支へます。母も良薬を服せる事が出来  
 ませぬので。何卒して良薬と服せて癒して遣た。と思ひまして。實は今  
 日鴻の巢まで薬と買ひに参りまして。天神橋の蔦屋で休んで居ります  
 と。旦那様が荷物とれ分けなすつてこれだけと端錢で出して置く。と仰  
 やつたのと。側で聞て居りまして。不圖悪い了簡と出してお包と持て逃  
 げました。が。中よれ書付でも在て。いお氣の毒で御座います。あら。今晚の  
 お泊りへ持て出て返へそうと思つて居りましたので。御座います。誠と  
 悪事と致して濟みませぬ。どうか御勘辨と願ひます。足が痛くて歩け

逆諺法研究會  
 監原多助一什言第三編  
 逆諺法研究會



明子  
芳屋  
画



角右雨妻おせい

道連小平

塩原角右三門



右内娘おるい

亦旅おかく

二兇塩  
原を欺  
むく



ませんのらどうの小柄とね抜なすつて下さいまし。と泣なから申ます  
と鹽成程賊といふ者之様な言を云ふものだナ。先刻荷物と攫て往く  
様子が貧の盗みどの思へんはい悪イエ眞實の盜賊で御座いません。  
其處が私の家で御座いますから虚だと思ふなら往て御覽なすつて下  
さい。と云ながらダク血の流れる足と引摺て上總戸のもとに膝行  
りより悪母アお前の眼病と治さふと思つてんだ事と致しました。此お  
士様に御詫言をして呉よ。と云ながら戸と明けます。四十三四の母  
が眼病の様子よて其側よ七歳位にある女の子が居ります側へ這ひよ  
り悪母アくお前の病氣を癒さうと思つて濟糸へ事と知ながら悪い  
心と出して此處よ居る旦那の荷物と奪うとそる所を捕まつて今お詫  
びをして居る所だ。母アお前もお詫をして呉れ母アくヨウく母  
「何の忤が不調法を致しました申譯がありません。何卒お免下さいまし  
鹽これと手前の宅か。と云て居所へたせいも驅けて参りまして鹽能か  
前来た糸へ前ハイ様子が分りませんで心配なおりますら参りまし  
たが。アノ包は御坐いました。鹽ナ包と奪られのせん婆誰君様で御  
座いますか。些少見へませんがどうの御勘辨と願ひます。不届至極を奴  
で御座います。サアおれへ来い。と云ひあゝの忤の頭髮と取て引寄  
せまえて。三つ四つ續け打撲ました悪母ア勘忍してくれ。婆勘忍  
して呉れと云て。コレ手前も元とは祿を取た者乃子でいかいか。假令如  
何よ貧乏すれ必とて人様の物と奪て亡なつた尊父様に濟まない。と  
ういふ了簡でそんな事をした。と泣ながらむしりついで打擲しますか  
ら側に見て居た塩原角右衛門も氣の毒と思ひまして鹽お免して遣  
て呉れ。こそが貧の盗みだ。と云ふ事だから。併し假令親の爲でも人の物  
と取るの宜しくないぞ。以後斯様な事があつてはあらんヨ。これの少  
しばりだが。小兒が怖いくと云て泣て居でいな。サこれは聊の  
だが小遣ひよ遣るのら何々好きな物でも母よ買つて遣れ。だがそれと知



らす氣の毒をい足へ手裏劍と打たのら嘸痛むであらう。餘程痛むのナ。それハ貴様が心得違ひとした故仕方な。ヨシ。これで別れる婆と  
 う致しまして悴が悪い事と致したの。金子を戴くなんぞといふ事は  
 出来ません。鹽少しばかりだが取て置け。悪ハイ。母さん折角の思召  
 だのら戴いて置きな。面目次第も御座いませんと云ひながら親子の  
 者が夫婦と見送りまして禮を申します。此方も取急ぎますのら出て行  
 ました。親子と上總戸の所まで鹽原夫婦を見送り雨戸と立て顔見合せ。  
 彼此阿母の眼病だと云たのが眼をパツチり明きまして。悴又向ひ婆問  
 拔。ととくんどやアいけねへとやねへか。悪エ。悉皆遣り損なつて仕  
 舞た婆。壁に成て仕舞て高飛をする時どうける積りだ。惡此小柄は滅法  
 又痛へや。母ア彼奴は今夜大宮の栗原へ泊ると云たのら今夜跡から往  
 て意趣返しに仕事として來るからヨ。婆よし孫へ。お前のすること  
 と何でもとととばありで。仕様が孫へ。又遣り損うといけねへから止し孫  
 へ。ヨ。と親子で争て居る所へガッツと戸を明けて來たの。次立の仁助

と云ふ胡麻の灰。仁母ア何しろ此處又居る事ハ出来孫へ。おの子と零取  
 した事。のらツキがま。つたといふ譯は百々村の藏入と金山の松と江  
 田村の源藏が捕まひて己れ達へ足がついて來たから直又逃げなくつ  
 ちやアいけ孫へせ。婆それ見孫へ。壁又成てどうするんだい。此處に藥  
 があるから付け孫へ。仁。どうしたんだい。小平哥々やアどうしたんだ  
 小。あア。よつまら孫へ仕事と仕損なつて。婆此の野郎は遣り損あつて足  
 へ小柄と刺されて痛くつて逃る事が出来孫へ。眞實又半間ナ野郎でし  
 やうがねへ。ヨ。小其代りやアあれのら此の小柄と持て往て足を痛め  
 られただけの仕返しをしなくつちやなら孫へ。と云て居る所へガラリ  
 ッと戸と明け鹽原が息と切て参りまして。鹽今小柄と忘れて往たのら  
 返して呉れと云われたから今まで眼と明けて居たか。くは急いで眼  
 と閉いで仕舞ひ小平もまこくして。小へい小柄ハ此處にありまほ。と



差出すのと受取て。鹽原と脇差へどめて。鹽考へて見れば誠は氣の毒な  
 事としたかと云ひながら急いで歸つて往ました。婆これだよ。する事爲  
 す事半間じや糸へか。彼の侍士の金と取て足へ小柄と刺されやがつて。  
 それと取りよ來ればハイと云て渡すんだもの。仕様がねへじやねへか。  
 このどじさよ仁。そうサ小平哥々失錯遣ちやアいけ給へせ。何しろ此  
 處には長くは居られ糸へからは。是から信州路へ掛るよやア秩父へ直  
 山越して逃げやうと惡漢三人相談して。零取したおゑいと背負いまし  
 て此所と逐電致しましたが。惡事と云ふものと遁れ難いもので再び追  
 捕に掛りますと云ふお話しになります。此方ハ鹽原角右衛門夫婦其夜  
 ハ大宮驛の栗原を申に旅籠屋泊り。翌七日江戸に着し本郷春木町よ  
 参りまして岸田字之助方と尋ね妹お龜に逢ひ。右内が變死の事と其事  
 より沼田乃百性角右衛門五十五兩貰ひ受け支度として歸府致した事  
 と知らせようと右内の家と捜しますと近邊の者の申すはね龜ハ字之

助さんが歸らないから世帯を仕舞ひ此月の三日に子供と連れて旅立  
 したと聞て鹽原夫婦ハ残念に思ひました。が返らぬ事ゆゑ直ハ筋違橋  
 内戸田能登守の家來野澤源作と申す者の妻お清か從弟ぢちあれば。是  
 を便り戸田侯へ奉公すみ致し。新地五十石にて馬廻り組と召抱へられ  
 ました。が翌寛延二己巳の四月御主人ハ野州宇都の宮より肥前の嶋原  
 を國替仰せ付けられ鹽原も戸田公の御供を致しまして國語の身と相  
 成ました。からとんと沼田下新田の角右衛門方を音信ハ打絶えまえた  
 が。再び實子多助と廻り逢ひまそお話しハ一息つきまして申しあげま  
 す



鹽原多助一代記第三編 終

鹽原多助一代記第四編

三遊亭圓朝演述  
若林珩藏 筆記  
酒井昇造 助筆

第四回  
少女罹災却得幸福  
老婆説恩將逞邪惡

引續さますお話しし鹽原多助一代記で御座ります。是の文化文政の頃  
まで大評判の者で。本所相生町に居りまして。地面の廿四ヶ所も持ち。炭  
薪の大問屋で御座います。が纈かの間も儲け出し。斯様な大身代も成た  
と申す。が。あんでも其頃の未だ世の中が開けぬ時分。御座います。が。  
當節の退々開けて参り。仕合せの事。の大火と云ふ者が殆ど御座いま  
せん。是の家造りが石造。或の店藏も成たり。又の煉瓦造も成りましたの  
で。マア火事が御座いしても焼ける道が塞つて居ります。から大きな



火事の御座いませんが。開けぬ往昔之折々大火が御座いました事で。丑年の火事。午年の火事。或ハ佐久間町の三味線屋火事杯。種々大火も御座いました。其中で一番大きいのは本郷丸山本妙寺火事。目黒行人坂の火事。これと聴衆方も御案内の事で。それハ赤坂の今井谷から出まして麻布十番の古川雜敷。綱坂と焼拂ひ。三田寺町聖坂のら三角へ掛け田町へ出まして。これが品川で鎮火致しました。大きな火事で御座いました。これが寶曆十年二月四日の夜も出まして。一日おいて又六日も出火致しましたのが。神田旅籠町から佐久間町と残らず焼拂ひ。遂ハ淺草茅町二丁目まで延焼し。見附を越して兩國へ飛火致し。兩國一面の火も成て。馬喰町と焼き。横山町三丁目残らず。本町通りと出て日本橋通りから江戸橋の方へ焼け。四日市。小網町一面の火もなり。深川へ飛火致し。深川一面の火となり。漸く鎮火致しました。すると其翌晩また芝神明前から出火致しまして。芝片門前。本芝残らず焼拂て。御濱で鎮火致し。僅た二日の間は江戸大半を焼き盡しました。が。これハ開けぬ往昔のお話しで。只今斯様な事の御座いません。田舎のお話しも。此時分のれ話しを致しまして。殆ど虚説の様も聞へます。沼田下新田杯と申ます。甚しい山間の僻村の様で御座います。が。當今では沼田のら前橋まで人力車でまいられ。前橋のら瀛車も乗り。ピイと上野まで忽ちに来られ。一日の内ハ東京のら往復が出来ます。事で。追々開けて参りました。故。これのらは鎮道が日本國中へ蜘蛛の巣と掛けた様もなります。さうですが。マア幾許便利もあるの知れませんが。其頃は一寸旅立するにも倒々不容易な事で。田舎の方が江戸見物も出るにも泣きの涙で出ましたもので。江戸の子が上方見物も往くも實ハ不容易な事と思ひ。留守中如何云ふ事の知らふも知れぬ。萬一これが永い訣別にあるのも知れない。云て。水盃なぞとして。刺繍だらけの俠氣な哥々がオイ。泣きながら川崎邊りまで送られて。参り。朋輩。そんなら健全で往て来な。男。阿母の事を留守中



何分頼む。なぞ云て泣き出します。これが遠國へでも行くのいと云ふと纒か百三十里ばりの所へ行くにも此の通りで御座います。が。現今では大違ひで。君草函と提げて何處へイヤ鳥渡西米利加まで往て來ます。杯と云ふ様な譯で。隣の家へでも行く様に思ていらッしやいます。が。其頃沼田下新田と申ては。随分山間の僻村で御座いました。扱ておのめい角右衛門に連れられ此處へ参りまして一年半ばり居りませ中よ。角右衛門の女房が没かりました。が。角右衛門も未だ老朽る年でもなく。殊も縁合も成て居るおのめさん。多助さんも叔母さんにあたるさうだのら。これと後妻も直したらよふらふと。村の者等が切り又勧めます。が。角右衛門は倒を堅固な人だから容易に承知せず。あんな年の違て居る若い女と女房も持は。世間へ對して誠に宜敷ないからと。云て聞き入れませんのと。さうでない貴公の跡目相續とする多助さんの叔母なり。殊も彼の子と可愛がつて能く世話としなさるのら女妻に持つが

よいと。分家の者始め。村方一同の勧めに。止むと得ず承知致し。不思議な縁でおかめと後妻に直しました。これから十二年経ちましてのお話で。丁度寶曆十年お相成りますから角右衛門の年が五十四歳となりました。五八と云ふ奉公人と供に連れ。江戸見物ながら餘儀ない用事があつて國元と出立致し。馬喰町と宿と取て居りますと。二月四日の大火で。赤坂今井谷から出火し品川まで焼け込んで鎮火したと申すのら。恐怖こんだと思て居ると。又一日隔て。神田旅籠町から出た火事の前申上ました通り也へ。角右衛門も馬喰町と焼け出され。五八と大きな包みと脊負てせつくと逃げ出しました。が。往來くアリアアくあんど云ひながら大きな荷を擔いで。右往左往又駆け回る。此方からはお使番が馬に乗て驅けて來る仕事師は纏と振り鉤とかついで威勢能く繰出し。て参る騒ぎも。二人のまぶくしなから漸く逃げ出しました。が。往き所がありません。五八旦那さん恐怖じやねへか。一昨日大けへ火事があつ



て又今日こんな火事が始まるには恐怖こんだ。江戸は火早いと云ひや  
んやすが。こんな大けへ火事がこう續いてあるとハ魂消やした。火に  
追掛られるやうだヨ。危へども危へども。わんやどうも先の尖鋭た鷹嘴  
と擔いで驅けて居やそのら頭へでも打つけられて怪我でもしては大  
變でがんす旦那さん何處へ逃げやすの。角我れも始めて江戸へ出たの  
だ。困た。仕様がねへが。此間一度尋ねた小網町の積荷問屋ナ。彼處へ  
往くべいと。これから小網町へ参ります。此火事が日本橋通のら江戸  
橋。四日市。小網町へ焼け込んで参りました。ゆへ。角右衛門。又此處と焼  
け出されました。五恐怖ねへ處だ。江戸へ所にやア二度と再び来る所  
じやねへ。火は追かけられて居るんだ。ねへ。旦那さん何那へ逃げべいか  
角仕方がねへ外に往き所もねへ。深川の出船宿へでも往くべいと。  
深川高橋まで参り。ホッと一息吐く間もなく又此の火事が飛火がしま  
して深川一面の火となり。火の粉がバラ／＼落ち掛ります。から五旦那  
さん又何處へ逃げべえねへ。角何處へも往きやうがねへ。五ア、二度と  
再び来る所じやありやし。ねへ。角仕様がねへ。馬喰町の焼けて仕舞たか  
ら板橋へでも往て泊るべえ。五板橋まで焼けて来やし。ねへ。角さうし  
たら沼田へ歸るべえ。五沼田まで焼けて来たらどうする。角馬鹿云へと  
云ひなら。二ツ目の橋と渡り御竹藏逃りまで来り。ホッと一息吐きな  
から後ろの方と見かへせば。天一面に梨地の色を現し。火事の明り  
で往來を見へ透き。人々皆疲れて一人も出るものなく。往來ハバツマリ  
止て仕舞ひました。夜も段々と更け以前。御竹藏前で。現今交番所のあ  
る所。割下水の方へ掛ります。女の金切聲で。アレ一人殺し。と  
云ふ。角右衛門と氣が付向ふと屹見ます。一人の惡漢が島田  
鬚の女と捕へて。打擲するのみならず。娘の持たる包みと引攪つて逃け行  
きました。跡は娘と泣き倒れて居ました。が。何思ましたか。起き上り。前な  
る御竹藏の大溝へ身と跳らして。飛込まうとする様子。角右衛門



主從江戸  
の大火  
狼狽

百姓五八



百姓角左門



待合茶屋の娘お梅



の親切な男ゆへ驅け寄て突然娘の帯ぎは取て引留め角「オイ娘子お前  
 此溝へ飛び込のか。身投じや糸へか。何だの様子ぞ知んぬいが。男がお前  
 の荷物を攫つて逃げ。それに大そう打たれた様子だが一体如何いふ譯  
 でがんとす娘有り難う存じますすがどうぞれ放しなすつてくださまし。  
 妾と深川の火事で焼け出され。阿母と一處に逃げて来ります途中心阿  
 母おはぐれ。一人りで爰まで来ります。跡から附けて来た悪徒が突然  
 妾と突倒し。撲ち打擄致しまして。大事な荷物と持て往て仕舞ました。が。  
 彼の中は金子もはいつて居り。殊に大事な櫛笄や衣類も入て居ます  
 故。あれと取られました。阿母よどんな苛酷めに逢され殺されますか  
 知れませんから。寧ろその事死かうと思ふのでございます。角「マア待あせ  
 へ。私ハ田舎漢で始めて江戸へ出て来たもんだが。能く物を考へて見な  
 せい。盗人は荷物を取られる位は災難とはいひあがら些細の事だ。此マ  
 ア大けへ江戸の火事と見なせへ。何千軒とも知ん糸へ家が焼け。土藏倉  
 と落す中で。盗賊も包と取られた位。いあんでも糸へ。阿母よ濟ま糸へ  
 のらと云て。此溝へ飛込んで死ね。と年はいか糸へが餘まり分別  
 が有りやし糸へ話だ。お前様が御母様と逢て斯云譯の災難で取られた  
 といつてあなたが詫び事としたら御母様も聞かない事もあんめへ娘  
 「でもどうぞお殺しなすつて。角馬鹿な事と云は糸へもんだ。おんたが  
 御母様よ云ひよくければ私が一處お往て詫言として上げべいら。ア  
 レ「ママ心得違へとしちやいけまし糸へ。と留めるも肯かず娘ハ泣て  
 身ともがき騒ぎます。困り果て角仕様が糸へナ。五八ヤ「爰へ来  
 う五八「何んだか糸へ角早く爰へ出て来う。何處へ往た五八「ねらア人殺  
 くと云ふられたつてなくつて堪りやし糸へから茲處に引下つて居  
 りやすのだ。角「今此娘子が身投やうとして留めても肯の糸へから茲處  
 へ来て手傳て押へて呉れ。と云はれ五八出て參り五「ナニ身投るつて止  
 しなせへ。止すが糸へ。此んな小けへ所へ這入て死ねるもんじやア糸

の親切な男ゆへ驅け寄て突然娘の帯ぎは取て引留め角「オイ娘子お前  
 此溝へ飛び込のか。身投じや糸へか。何だの様子ぞ知んぬいが。男がお前  
 の荷物を攫つて逃げ。それに大そう打たれた様子だが一体如何いふ譯  
 でがんとす娘有り難う存じますすがどうぞれ放しなすつてくださまし。  
 妾と深川の火事で焼け出され。阿母と一處に逃げて来ります途中心阿  
 母おはぐれ。一人りで爰まで来ります。跡から附けて来た悪徒が突然  
 妾と突倒し。撲ち打擄致しまして。大事な荷物と持て往て仕舞ました。が。  
 彼の中は金子もはいつて居り。殊に大事な櫛笄や衣類も入て居ます  
 故。あれと取られました。阿母よどんな苛酷めに逢され殺されますか  
 知れませんから。寧ろその事死かうと思ふのでございます。角「マア待あせ  
 へ。私ハ田舎漢で始めて江戸へ出て来たもんだが。能く物を考へて見な  
 せい。盗人は荷物を取られる位は災難とはいひあがら些細の事だ。此マ  
 ア大けへ江戸の火事と見なせへ。何千軒とも知ん糸へ家が焼け。土藏倉  
 と落す中で。盗賊も包と取られた位。いあんでも糸へ。阿母よ濟ま糸へ  
 のらと云て。此溝へ飛込んで死ね。と年はいか糸へが餘まり分別  
 が有りやし糸へ話だ。お前様が御母様と逢て斯云譯の災難で取られた  
 といつてあなたが詫び事としたら御母様も聞かない事もあんめへ娘  
 「でもどうぞお殺しなすつて。角馬鹿な事と云は糸へもんだ。おんたが  
 御母様よ云ひよくければ私が一處お往て詫言として上げべいら。ア  
 レ「ママ心得違へとしちやいけまし糸へ。と留めるも肯かず娘ハ泣て  
 身ともがき騒ぎます。困り果て角仕様が糸へナ。五八ヤ「爰へ来  
 う五八「何んだか糸へ角早く爰へ出て来う。何處へ往た五八「ねらア人殺  
 くと云ふられたつてなくつて堪りやし糸へから茲處に引下つて居  
 りやすのだ。角「今此娘子が身投やうとして留めても肯の糸へから茲處  
 へ来て手傳て押へて呉れ。と云はれ五八出て參り五「ナニ身投るつて止  
 しなせへ。止すが糸へ。此んな小けへ所へ這入て死ねるもんじやア糸



へ角「ナアに母様に濟まねへら身投るだつて五八「よすがいよヨ。死ん  
 じヤア命がさくなるヨ。角「當然の事だ。娘ッ子私ア田舎漢ですが此火事  
 又焼け出れ那地此地逃廻つて包と脊負たまふ泊る所も糸へのでこゝ  
 らとろくして居る所だが。貴女の死うとそをのを見掛け。どうも此儘  
 見捨て往く譯やアいきやし糸へから貴女の家迄一所又送つて上げ  
 やんせう。娘「有り難う御座います。が妾も焼出されて家はなものでござ  
 んます。赤坂の火事で焼け出され。深川橋下の親類共へ参つて居ります  
 と今晚の火事で焼けて仕まひ行き所はございませぬ。角「仕様が糸へ因  
 つたもんだア糸入。どうの捜したら知んねへ事もあんめへ。五「どうの捜  
 したら知んねへ事もあんめへ。角「私等も馬喰町のら焼出され。小網町か  
 ら高橋の方へ逃廻つて泊る所もないが。あましろ。爰往來だ。ら。マア  
 一所お出させへ。五「爰往來だからマア一所來なせへ。角「なんだ同  
 じとばかり云ていやアがる。と三人連立ち山の宿へ参り。山形屋と申す

宿屋へ泊り段々娘に様子と聞く。と妾の三田の三角のあだやと申しま  
 す。手引茶屋の娘でお梅と申す者でござんすが。おろくと申す母と二  
 人で。深川橋下の親類内に居ります。と。又焼出され逃る途中阿母と  
 ぐれくしまし。先きの男と包と奪れましたが。何の中お金の金もあり大  
 切な櫛笄又衣類もといつて居ますから。あれと奪た事と母が聞かすれ  
 ば。どんなに説ても許さ事じやアございませぬから。どうぞ身と投げま  
 すから。お見逃しくださ。と。ばり云て居ます。ゆゑ糸右衛門も困り果  
 て。角「困つたもんだ糸へ何しろ捜して見ませう。外に仕様が御座いま  
 せんから。當てもないとおございませぬ。三田の三角へ尋糸又往きます  
 のよ。若い娘と一人置いて。心得違ひな事でもなつて。ならんと存じまし  
 て。五八「付て置き。角右衛門の出掛けまして。三角から深川と那地此地  
 と三日の間捜しました。が。心當りもさく。鼻の穴と黒くして。埃だ  
 らけにあつて。歸つて参りました。五八「お歸んかんし。旦那さん知れやし



ねへの糸角「しん糸へヨ。どうも困つたもんだ。アノ何んど云たつけず。  
姉さんまア爰へ御出なせへ。貴女も知ての通り今日で三日の間捜しや  
すがあましろ焼け原べいて尋る所もなし。自身番へ係て尋てもどうも  
しんねへ。誠又困つたもんだが。斯事云て氣よしちやアいけねへが。  
是程の火事だつて。なんぼ私等が田舎漢だつてこうやつて手間りけて  
尋てしん糸へ譯の糸へが。何しろ大火の事だから御母様もおらど同じ  
五十の坂と越して居る人。殊に女のこつちやアあるしするおら。殊まよ  
つたら焼原へ突飛されておつ轉んだ上も人がぶち乗つて。マアそんな  
事もあんめへが。焼け死んだやうな事があつたら貴女の身の上どこ  
へ連をてめへつたらいふ知ん糸へおらそれが心配でなん糸へ娘御  
信切様有り難う存じます。私共の阿母は殊によつたら焼け死んだかも  
知れませんが。焼け死ますれ阿母のあらだの落籍が出来て却て仕合  
でございませす。角馬鹿などを云ふもんじやア糸へ。年イい糸へつて母

様も小言云られるのがつれへもんだから焼け死ばいゝなんぞと荷め  
にもそんな事と云つちやア濟みまし糸へヨ。娘いへはんとら阿母で  
とまざいません。虚の阿母。でございませす。それ又心得違な人で。悪い事ば  
かり致し。妾は幼さ以内から育ててくれました。おら仕方なくついて居ま  
すが。ヤレ妾又出ろの。それが否やなら。女郎又賣るの。無理難題を申し。  
まだそればりでいありません。阿兄と云ふものがございませすが妾に  
は義理ある兄でございませして妾のやうな者を捕へ。猥褻しいと云ひ  
かけませすが。假にも兄弟でそんなと出来ませんと。衝放ましたら妾を  
憎み出し。阿母と二人りして責めます也へ。四五年前から驅出して仕ま  
いふかと思ひました。が。参る所もないので仕方なく悪黨の親子の側  
に附随て居ります。阿母が焼死すればどんな辛奉公としても妾の堅氣  
もありたいと思つて居ませす。角そりやア怒れへこんだが何か外も親類  
でもあつて預けて往く所はありやし糸へか。娘妾には親も兄弟もない



者と助けて幼さい内から育てたのだと。阿母が申して居りますからな  
 んよもございませぬ角「いくつ位おら育たのでがんす娘七歳の時おら  
 育てたのだと申します角「でも實の父母が在りやせう娘あるのでござ  
 いませうが何處に居りますやら一向妾よの分りませぬ角「ありやア困  
 つたが實の母様の名はなんと云ひやすの娘「なんと申すか存じませぬ  
 角「それぢやア尋ねる手が、りがねへが。實の父様の名もしれねへかね  
 へ娘「親父の名の妾の幼少時分懐は抱て寐て居ながら迷子にぢらな  
 やうよと口で教へた事と幽微又覺へて居ます。直實の虚かしりませぬ  
 が。儲の本郷春木町味噌屋の裏で岸田宇之助の娘れゑいと云へばいぐ  
 れないといわれた事が耳に残つて居ります角「ナ、岸田宇之助の娘だ  
 ど。ハチチそんなら儲か十三、四年跡保泉村の原中で賊の爲め又奪取され  
 た岸田屋宇之助さんの娘おゑいさんか娘「ハイ貴所はどうして御存じ  
 角「コレハ魂消た。五八なんとマア不思議なとだのう五「どうもマア不

思議なとで。おゑいさんが出て來るとは不思議を譯だ。して見ると此火  
 事も中々好火事だ角「エ、ハア心配とふた糸へでも貴女の實の母様は  
 達者で居るおら逢せて遣るべい娘「ほんどうの母様又逢せてください  
 ますと角「それには種く譯があるが。話は家へ歸へつてから緩裕りしべ  
 い。我れは沼田の下新田と云ふ。山國だがお前さんの實の母様は我れ  
 が家に居るんだ娘「どうもマア不思議な御縁で。どうぞ御伴れなそつて  
 くださいまし角「實に不思議な縁だ。構ひ糸へでいきやせう其の母様は  
 尋糸ないでもいゝと。急又支度として三人連立ち道でいれ榮にと何も  
 深い咄しもせず。國へ歸りましたが。國の方では江戸で大火事。江戸中  
 丸で焼けてしまつたやうなと咄して居る所へ歸りました故「かめ「オ  
 ヤマ、旦那御歸り遊ばせ。江戸は大火事であつたと云ひますから御怪  
 我でもなければいゝと。どんなに心配として居りましたらう。おんだの  
 江戸に残らず焼けてしまつたやうなと申しますし。又跡で聞けば觀



音様の残つて居ると云人もあり。せん五八どん大きき御苦勞だつた五八「へい只今戻りやした。どうも江戸の糸れへ怖かねへ所。でなかくい、所だといふのは嘘でがんと。側からく火事が追掛て来て。彼處此處逃廻つて漸やくのこんで歸つてめいりやしたが。孫子の代迄遣る所ぢやアありやしねへ角「おめ江戸へ往つた土産に好物と連れて来た。チイこつちへればいんさんしめめ「オヤどつら連れて来たのぞ。云角右衛門は娘又向ひ角「コリヤアねらア喚アだ娘「コレハ御初メ御目よのりります。私ハ旦那様の御影様でまちらへ参りました者。何分宣處御願ひ申します。め「そうでおさまます。まん山の中へ能くマア御出だねへ。久し振で江戸の風を見たがどうもい、縹致だ事年の幾許ナニ十九だとへ。オヤさう焼け出れて。それで。それハマア御氣の毒ナ。旦那これは何所の娘です。角「これハ十三年跡保泉の原で畧取された前娘のれゑいだよ。能顔と見るめ「ナニ

エ「角「これが前娘の實の阿母だアヨ。云れ親子は思ひ掛さき再會よ。おかめは娘の手と取つてつく。顔をながめながら。旦那様どうして此子と連れて来てくださったか。角「なんとマア不思議なわけ。此間の火事の時。此娘も焼出され逃げる途中阿母又別れ獨りで来る後。惡徒又附られ持て居た包を奪れ。阿母又濟ないと云ふ所。身と投げやうとする所へ。已等が通り掛り助けたらへで様子を聞ばこれく。と云お話。我も飛立ばかり嬉しく思ひ。直に連れて来たんだが。何んと嬉しおんべい。かめ「どうもマア思ひ懸けない事。大層大ききつたんで一寸表で逢たつて知れる氣遣ひはありません。お前が七歳の時妾がお前と脊負馴れぬい旅をして。お前は畧取され。私ハ惡徒の爲に既又殺されやうとした所を。まゝの旦那が助けてくださり。それから後。御厄介あり。今では何一つ不足のあんが。畧ににつけ。寒ひにつけ。朝夕共お前の事を些しも妾は忘れた事。在りません。ほんどうもマア幼な顔を見覺



へて居るヨ。旦那の前でこんな事といつては誠は濟ませんが。先の連合の宇之助さん。誠は能く肖て居りますヨ。どうもマアほんどうと思ひ掛けない事で夢のやうな心持です。鳥渡立て見およ。マア大きく成たこと。そして風のいと。鳥渡坐つて見およ。一と廻り廻りなよ。おどといろんな事と申し。先づ安心して先の名と呼がいと。これから名とも改ためおゑいと呼び。多助とそ従弟どうしの事故。行末は配偶の心得で。二月の末。五月の頃迄中よく日と送りました。一日角右衛門が多助と云ふのよ。おゑいがまだ御城下と見たと。いづれへ一所よ連ていつて見せて来う。沼田は土岐様の御領地でおぎいます。多助のおゑいをつれて来り。見物させて歸つて来るぞ。其跡から續いて内へ入て来た男。鯛鉄造りの長物とさし。昔の三度笠と手に下げ。月代と生し。末毛先と散ばし。素足。草鞋。袴。穿いて。男。ハイ御免ね。五八。ヒエ。何所から来た男。鹽原角右衛門さんと云ふのは。此方でおせへやすう。五八。ハイ愛でおせ

いやす。男。今愛の家へ二人連れで入た。若いお方の。こちら。若旦那がおぎいますか。五。ハイ。今こけへ入たのは。おら。家の息子。どの多助さんだ。が。なんだ。へ。男。その若旦那と一所に附て入た。美しい姉さん。此家の令嬢。でおぎいやす。五八。おら。ア家のおゑいさんと云ふ娘さん。だ。が。なんだ。へ。男。ハイ。そうですか。そんなら。お前さんの所の娘。違へね。のだ。チ。阿母。ア。こつちへ。入ね。へ。ナ。婆。ハイ。御免。おさいと云ながら。入て来た。婆々。は。歳頃。の。五十五。六。で。デ。ツ。ア。リ。肥。り。頭。と。結。髪。よ。し。て。細。い。飛。白。の。單。衣。よ。黒。鷲。絨。の。帯。を。前。よ。し。め。白。縮。緬。の。ふ。ん。ど。し。を。長。く。し。め。鼠。海。氣。の。脚。半。よ。白。足。袋。麻。裏。草。履。ど。い。ふ。姿。で。す。ら。五八。の。い。ろ。ん。お。人。が。來。な。ア。と。吻。や。い。て。居。ま。そ。と。婆。角。右。衛。門。さん。ど。い。ふ。お。方。に。御。目。に。掛。て。へ。も。んだ。ね。へ。五八。れ。ら。ア。旦那。の。高。平。村。迄。用。が。あ。つ。て。往。や。し。て。わ。り。や。し。ね。へ。若旦那。べ。い。だ。婆。そ。ん。な。ら。若旦那。よ。一。寸。御。目。よ。の。り。た。う。存。じ。ま。す。五。多。助。さん。何。事。だ。の。し。ん。ね。へ。が。貴。所。に。逢。て。へ。と。云。ふ。人。が。來。や。し。た。と。



少女再び  
悪婆の手  
よ落んと  
せ

仇屋おろく

路連小平

十二

徳川幕府一統史第四編

徳川幕府一統史第四編

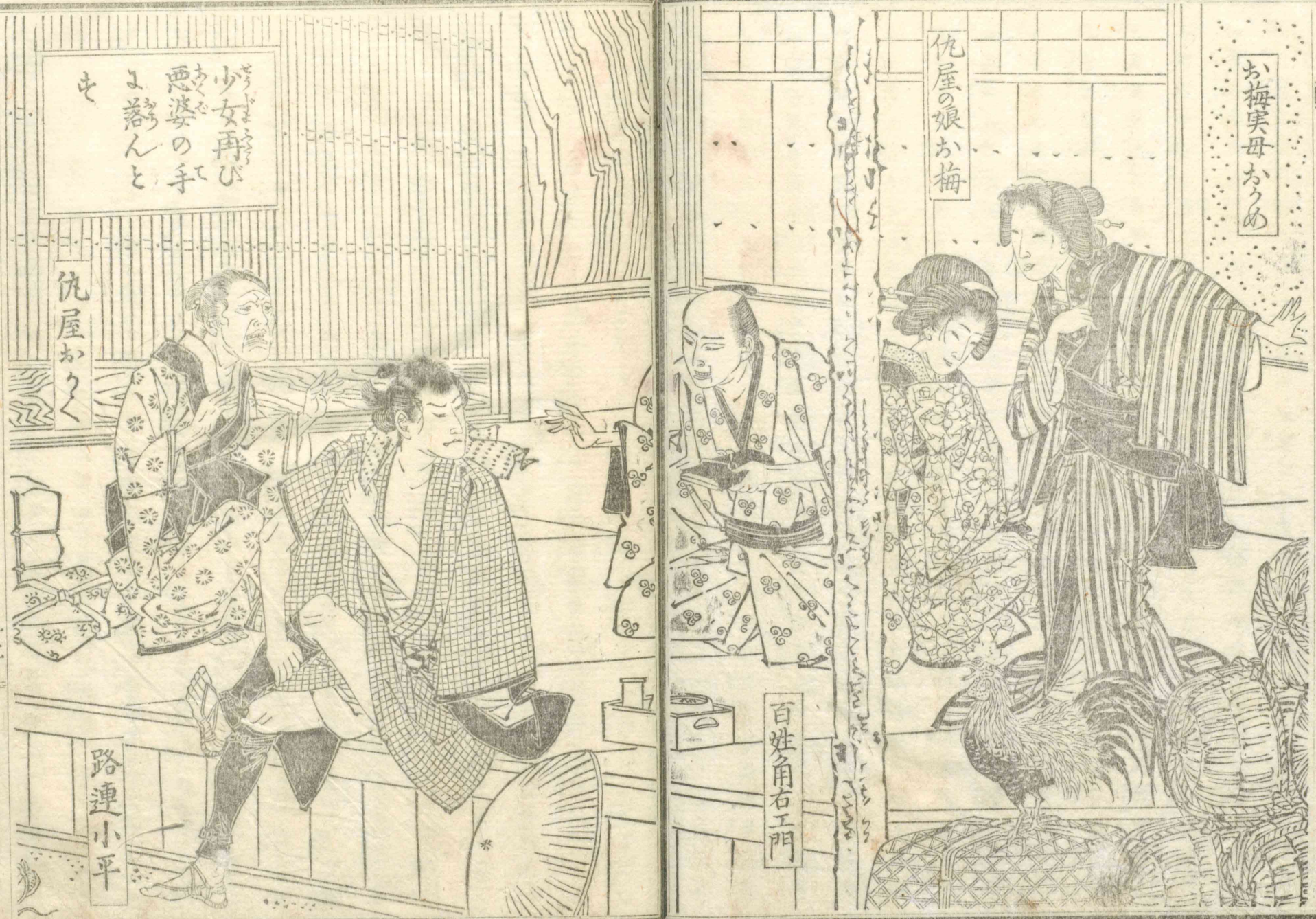
仇屋の娘お梅

お梅実母おうめ

百姓角石工門

徳川幕府一統史第四編

徳川幕府一統史第四編





いふに奥より出て来る多助と。今年廿歳で。いとあしやか息子で。慇懃  
 り手とつかへ多、あいよく親父はかりましねへが。お云置でよろし  
 なれ私承り置まして。親父申聞かせせう。婆貴所は御子息さんで  
 ございます。只今あなたと一所、爰の家へ入りました娘のこちらの  
 娘子だ。此御奉公人が云たそうでおさいます。一躰あの娘のこちら  
 のら御貰ひささいました。それと承りたうございます。多、イへ貰つた  
 譯では御座いません。あれは私の家の先からの娘でおさります。婆、お惚  
 氣なすつちやアいけません。ゆりや妾の娘だ。妾しやア三田の三角の  
 わだやと云引手茶屋のれりくといふ婆、だが。あまの妾の大事。金箱  
 娘。此二月大火事の時深川と焼出され逃げ出す途中で。いぐれてしまひ。  
 今日が日迄行衛が知れないから段々手分けをして捜がしたが。どうし  
 ても知れなかつたのが。不圖山の宿の山形屋と云ふ宿屋に泊つて居た  
 客が娘を連れて沼田のこれくの所へ一所に歸つたと聞た故。私も娘が

いなけりやア商買も出来ない事故。悴を連れて怖ろしい開けない。白井。八  
 崎さんどと云ふこわい山越しとして。此所へ来て沼田の御城下へ宿と  
 取り。三月の間尋ねたが知れぬも道理。こんな山の中は居るんだもの。  
 亞魔女も討だ。先刻御城下でね前と一所、歩いて居たのと見掛たら  
 尋ねて来たの。爰の家の御子息が悪足に。あつて居るらどうだ。知ら  
 ねへが。どう云ふ譯で誰と沙汰としてね前の所の娘おしたか。それと承  
 りたいのだ。多、ハイどう云ふ譯でがんすか。私から精しい事と申した所  
 が御聞入もありやすめへし。親父留守でがんすから親父の歸る迄御  
 待ちなまつてねくんせへ。高平迄参りやしたのです。明日は儘の  
 戻りやせう。待たれやすから明日まで待てくださ。婆、待たれせん。ヨ。  
 御歸りまで宿と取り銭と遣つていられるものか。今迄の位路金と遣  
 つているの知れねへ。多、沼田のそこへ宿と取りなさるか。そこを聞かせ  
 て置てください。親父の歸たら御迎ひも出す様にいたしませうの



ら 婆出來ません。ね腹がすいたのら御膳と御馳走になり。旦那の御歸り  
 まで泊て置てください。若い衆さん鹽へ水と汲んで来て御くんあさい  
 五旦那が留守だから若旦那がいろく 咄しとするのに解らねへ事  
 と云ふ 婆あんでもいゝ妾の娘をこゝへ連れて来て。我物顔も娘でおさ  
 いますと云わきて。はい左様でおさいますと云て歸る様な人間じや  
 アおさいませんヨ。田舎じやア幼さひ時めら木綿着物で育て。教る事ハ  
 糸練の機織位で濟むけれど。江戸育の娘といふ者は。幼さい中から絹布  
 ぐるみ。其上金もあして藝事を仕込み。おれめら親が樂を仕様と思つ  
 て居るのよ。其思と忘れ。親と見捨て家出とする様な巫魔女だめら唯ハ  
 置れないのだ。マア御免なさい。云ひながら上りよかゝるから 五上つ  
 ちやアだめだ。名主どんえそう云ふぞ 婆どこへでも往てそう云へ。あつ  
 ちで名主へ出のだ。ぐすく するぞ 零取の罪も落すぞ。ナニ零取どのあ  
 んだ。云ながら屹度詰よると小平ヤイく。なよとするのだ。手前我の

阿母と打つのか。ヤイ百姓大問抜け。我色の阿母も指でもさすときあね  
 へぞ。まおくしやアがるぞ。此家へ火を付からさう思へ 五たまた火  
 と付られちやアたまんねへと。五八は江戸の火事で懲りて居ますから  
 驚きました。此權幕も奥でいためと。ねえいが。どうしたらよめらうと  
 途方又暮れて居ます所へ角右衛門が歸て参りました。が此人の名主か  
 ら三番目の席に坐る家柄と云ひ。殊も分別ある人ゆゑ。少しもさわがず  
 落付拂ひ。彼の親子連れの大悪人。ね角婆と道連れの小平を向ふへ廻  
 はし。掛合のね咄し。此次又申し上げます



鹽原多助一代記第四編終

三遊亭圓朝演述

鹽原多助一代記第四編終

鹽原多助一代記第五編

三遊亭圓朝演述

若林珮藏 筆記

酒井昇造 助筆

第五回 一家喜憂輻二病夫之枕邊  
終世苦樂生孤兒之身上

扱て百姓鹽原角右衛門といふ人と田地の三百石も持て居ります。村  
方で田地の三百石も持て居ると富豪たもので御坐います。殊に家柄も  
いふら坐席も名主から三番目といふので、其頃は家柄を尊びました。  
其百姓の家だから旨く往たら二三百兩も強談て往々ふといふ權幕で。  
相手名も負ふ又旅お覺。是のちよく旅へ出て。昨日歸たと思ふ  
と又今日旅へ出た。又旅へ出たといふ所から自然又旅のお覺と緯號と  
取りました者で。其子として道連れの小平。是も護摩の灰の頭分。此奴

鹽原多助一代記第五編

三遊亭圓朝演述



がドツサリと上げ胡座とゐくと。挺でも動かまいといふ。親子諸共名う  
 ての悪黨だら。其權幕の強いのも怖れて五八も後へ下り。名主へ訴へ  
 やうとして居る所へ歸つて来たのが主人角右衛門で。奥へ往て様子と  
 聞く。これくくと云ひますと。なかくの沈着ものです。あら直も出て  
 参りまして。角ハイ是はお初にお目も掛ります。私ハ鹽原角右衛門で御  
 坐います。生憎只今高平まで参つて居りやせんで御坐りやした。何  
 かア譯は知りやせんが。悴や若へもんどもが頻りよ心配して居りや  
 すが。どういふ譯で。私の所へお出でなすつて。人の娘と畧取したから名  
 主へ届けるといふのでが。其次第と一通り承つた上で御挨拶と  
 致しやすが。一體貴所方の何處らのれ方で御坐いやすのくハイ貴所が  
 角右衛門さんですか。お初にお目も掛ります。私は江戸三田の三角で  
 仇屋といふ引手茶屋の主人。お覺といふ婆々で御坐ますが。此間の深川  
 の火事で娘と見はぐり。行衛が知れませぬ。只今も申すとはり。漸々

の事で突き留めて。怖ろしい峠と越し此沼田といふ所へ参り。宿と取  
 探して見たが知れませんで居た。今日不圖御城下廻で見掛けた女の  
 娘も宵て居る。跡と附けて来て見ると此方の家へ入つたから。此奉  
 公人又尋ねると宅の娘だと云ひおさるから。夫のどういふ譯で。他人の  
 娘と誰へ沙汰として娘にしな。つたか承ります。此奉公人が名主へ  
 訴へるとか。打つと叩くとの云ふ。賣言葉に買言葉。果ては遂又大  
 きな聲と出しました。所憚が腹と立て大聲と出しました。其様な事と  
 しないでも。どうでもお話に成る事だが。お前さん一体どういふ譯で。己  
 れの娘だと仰しや。いませるか。それと承りたいね。角ナール程。ハイ御尤  
 もの次第で御座りやす。實は御話としない事ハ譯りましね。が。少しマ  
 ア用向が有て。今度初めて江戸へ参り。馬喰町へ逗留して居りやす。御  
 案内の通り大けい火事。私も始て火事に逢やした事ゆゑ誠又恐怖やし  
 て。彼處此處逃廻つて。本所の御竹藏へ掛ると。美しい姉さんがお竹藏の

通説法研究會

通説法研究會



溝へ身投て死ぬべいと云ふ所を私がお助け申して。段々仔細と聞いて見れば。これくで阿母ははぐれ。悪徒の爲め。包を攫われました。中へ大事な櫛笄もあり。金も入って居りやそのら。あれを取られていどうも阿母に云譯がないから。かつ死ぬと云ふら。マア待つしゑへど。いらざる事だが私も見兼ねて。マア兎も角もど宿屋へ連れて往て。それの貴所の行衛と探したども。探さねへども。三日の間。焼原と探しやした。が。どうしても。貴所の行衛が知れやしねへ。困つたもんだ。思つた。が。何處へ預けると云ふ所もあく。親類もな。いふし仕方がねへ。私の家へ連れて參つて。段々様子と聞く。親御もなく。兄弟もない。いふもんだ。ら私の娘とするより外。仕様がねへ。じやア。あんめいじやねへ。かか。「お惚氣な。さつて。いけません。何だ。とへ親の行衛が知れいから。御前さん。自分の娘にした。とお云ひだが。それが立派なお百姓さんの御挨拶で。御坐いますか。へ。承りますれば。此村方でもお前さん。名主あら何

番目へどかへ坐るといふ。立派なお家柄で。田地の三百石もれ持ち。あさる立派なお百姓さんが。何の挨拶だ。縦令親の行衛が知れない。云ても。其町内に自身番も有れば。名主もある事だ。のら。夫々へ掛つて。名主へでも預けて。歸らなければ。眞實の信切とは云へ。私。が。これ。から。彼の。亞魔女で。少し息とつがふと思つて。居た。よ。大事。な。娘。を。攫。は。れた。お。蔭。で。家。と。持。つ。事。も。出。來。な。い。の。ら。岡。引。も。頼。ん。で。金。と。遣。ひ。娘。の。行。衛。を。尋。ね。て。貰。つ。た。が。知。れ。な。い。内。漸。々。山。の。宿。の。宿。屋。で。沼。田。の。こ。れ。く。の。二。人。連。の。百。姓。が。斯。云。ふ。娘。と。連。れ。て。國。へ。歸。つ。た。と。云。ふ。の。ら。跡。を。附。け。て。來。て。見。る。と。沼。田。か。ら。は。三。里。も。引。込。ん。だ。所。と。は。知。ら。ず。宿。錢。と。遣。つ。て。長。い。間。探。し。漸。々。突。留。め。て。お。掛。合。と。す。る。と。そ。ん。な。御。挨拶。又。亞。魔。女。も。亞。魔。女。だ。親。が。知。れ。な。い。か。ら。と。云。つ。て。す。う。く。し。く。此。處。の。娘。に。成。て。居。る。了。簡。が。悪。い。や。他。の。娘。と。一。晩。で。も。泊。め。て。見。れ。ば。瑕。を。附。け。た。と。し。の。思。え。ま。せ。ん。ら。私。は。も。う。連。れ。て。は。歸。ら。れ。ま。せ。ん。角。そ。ん。か。ら。私。の。方。へ。お。賞。ひ。申。し。や。し。



やうかく「貰ふなら貰ふやうに。私の方へ話の極りと附けて。得心の上で貰ふ様よおしなさいナ。徒は上げらませんヨ」角「ナール程是は御尤な次第だが貴所が愛想が盡きて私の處へ呉れるなら。貴所から儲か娘にくれたと云ふ書付と一本お貰ひ申し度もんだが。徒の上げられないとは何いふ譯でがんす。あ「旦那れ金と三百兩おくんない角「ナニ三百兩とへ。そんな事を云たつて出来糸へ相談だ。何故三百兩呉れるぞ云のでがんすかく何故と云て二月より五月まで他の娘と引籠つて。斯様な山の中へ連れて来て居るんだヨ。私を引手茶屋として居るから。娘か居なくつては商賣とする事も出来糸へから。長休みにするのみならず。路金と遣て山の中へまで尋糸て来てサ。ハイ上げませうと云て江戸へ歸へらますかへ。呉れるなら上げまいものでもないら。夫れだけの入費とれ出しささいナ。私も十九まで育てた填草をしなければりやありませんヨ。金が出来糸へから直ぐ御返しなすつてください。連れて歸つて女郎まで何にでも打ち賣て填草とするのら角「誠なれ氣の毒で御坐いますが出来せん。どうもハニ三百兩ハ迎も上げる譯よ。参りやせんかく旦那だ参りませんで済ますかへ。そんなら何故他の娘と無沙汰で連れて来たヨ。親又無沙汰で連れて来た其處は重々済まないが。何分親御の行衛が知ん糸へもんだのら。據あく連れて来たのでかく親の行衛が知れな。のら連れて来たといふ云譯で済みます。角「誠なれ氣の毒で御坐います。全體彼れの貴所の娘に違ねへのあ「私に娘だから私が路金と遣て態々追掛けて来たのサ。角「それがサ。あのお梅といふ娘と七歳の時に保泉村の原中で畧取されたお榮といふ娘だが。どうしてそれと貴所が娘よしなすつたへ。と云はれたのくと。慥としかくハイ貴所の何とお云なさる。角「何も云しましねへ。あれ岸田屋宇之助と云ふ旅商人の娘です。が。お袋が亭主の歸りの遅いのと案じ。あの娘と連れ亭主の行衛を探して。小川材まで来る途で。親子連れに護摩の灰の爲め畧取された娘だ

でも打ち賣て填草とするのら角「誠なれ氣の毒で御坐いますが出来せん。どうもハニ三百兩ハ迎も上げる譯よ。参りやせんかく旦那だ参りませんで済ますかへ。そんなら何故他の娘と無沙汰で連れて来たヨ。親又無沙汰で連れて来た其處は重々済まないが。何分親御の行衛が知ん糸へもんだのら。據あく連れて来たのでかく親の行衛が知れな。のら連れて来たといふ云譯で済みます。角「誠なれ氣の毒で御坐います。全體彼れの貴所の娘に違ねへのあ「私に娘だから私が路金と遣て態々追掛けて来たのサ。角「それがサ。あのお梅といふ娘と七歳の時に保泉村の原中で畧取されたお榮といふ娘だが。どうしてそれと貴所が娘よしなすつたへ。と云はれたのくと。慥としかくハイ貴所の何とお云なさる。角「何も云しましねへ。あれ岸田屋宇之助と云ふ旅商人の娘です。が。お袋が亭主の歸りの遅いのと案じ。あの娘と連れ亭主の行衛を探して。小川材まで来る途で。親子連れに護摩の灰の爲め畧取された娘だ



が。それとどうして前さんの娘よしたあ。其次第と承りていもんだ  
のく「どうもマア思ひ掛ない事とお云ひなさる。畧取されたか。なんだの  
そんな事と知りません。角「前さん惚氣たつて無益だヨね。龜此處へ來  
て一寸御目よ掛れと云ひれ。こわく「あがら出て來るお龜とね。榮は。角  
右衛門が居るのら。大きき氣丈夫お思ひお龜ハズツと進み出て「チイ  
おのくさんとやら。前忘をいしまし。十三年跡鴻の巢の田本で中食と  
した時。前さんと道連よ成り。やれこれ云つてね。榮を可愛あり。夫から  
駕籠へ乗せて來ると。保泉の原中で此ね榮と攫ひ。能くも此年月娘よし  
て居なすつたヨ。と云ひれ。のく「オヤおのみさん。おふもマアと云つたが。實  
母の水龜が此家よ居るとは思ひ掛ない事ゆゑ。流石のわのくも驚顛し  
て。云ふ事も前後致しれど。く「しあがらかく「誠とどうもマアわのみさ  
ん思がけない所で御目に懸りました。貴所いどう云ふ譯で此方よいら  
つしやいますか。角「これよはいろく「譯あつて。今私に私か。噂々よ持て居

やすヨ。それから火事場でもつてからに。阿母にえぐれておつ死あうと  
する娘と助けて連れて來ど。私がおはんとら。の娘だど云譯ヨ。龜「マアどふ  
も。いけしやア。く。能く他の娘と攫つておいて。強談がましい事とかい  
ひだが。誰よ沙汰として他の娘を自分の娘よおしだヨ。かく「マアお神さ  
ん。そら御仰ればお腹もたちませうが。私も旅なれない事故わの折はね  
前さんよえぐれたから。どうか捜してお前さんよ渡さうと思つて。那地此  
地と捜しましたが。どうしても行衛が知す。那の子に聞ても。頑是のな  
七歳の八歳の子供もえ何も分らず。親類ハ知れず。仕方がないのら。江戸  
へ連れて行て私の娘よして育てるの。當然まへちやアありませんか  
角「前さんの云所も又尤もだ。親と尋ねても知れず。何と聞ても頑是ね  
へ子供で分らねへ。のら。貴所が娘よしたと云たねへ。かく「左やうで御坐  
いますヨ。それと畧取たなんどと云ひれ。ちやアつまりやアしません。角  
御尤も。の次第でがんす。私も其通り。火事場を那地此地尋ね廻り。どう



お前さんよ渡して上げべいと思つたが。どうしても知れず外に親類も  
 ねへと云ひ仕様かねへから。連れて歸つて娘よしたんだが。お互の譯じや  
 ア有りやしねへ。うく「お互」云たつてそれじやアどうもマアね前さ  
 んどうも。江戸から四五十里もあつた沼田まで連れて來るのは。ひどいぢ  
 やアありませんか。角「貴所も保泉村で畧取しでもあるまいが。親の行衛  
 がしんねへからと云つて。江戸まで連れて往つて娘よすま心。道理は同じ  
 事だ。眞實よマアおろくさんなせ他の娘と角「騒がなれでもい。我が  
 云所があるから黙つてゐる。扱これは實の阿母ておざりやす。貴所も實  
 親がしんねへ。自分の娘よして居たんだらうから。實親が知れたら  
 返すだらうねへ。く「返す」たつて。どうも徒に返へされません。私も路  
 金と遣ひ。うやつて態々尋ねて來たんですもの。と云つて居る側  
 ら道連れの小平がしやばり出て。小「阿母」黙つていねへ。阿母ハ「筆」碌して  
 ゐる。つまらねへ。とばかり云て居る。旦那へお前さんは火事場で阿

母の行衛が知れぬへ。ら娘よしたと仰やるが。私の方ぢやア七歳の時  
 ろら。阿母が丹誠してお絹布ぐる。其の上よいろ。く「お藝事」仕込で。よ  
 れから樂をしやうと思つて居る。其恩義と忘れて。ムク。く「此方の宅  
 に居る亞魔女も亞魔女だ。夫とたい。此方の宅へ取上げて。只歸さうぜい  
 つちやア旦那それじやア咄しが出来やせん。私も出る所へ出て話と付  
 けやせう。角「出る所へ出るなら勝手よ出なさいな。だが全体那時娘と畧  
 取れ。母様が惡徒に強姦れやうとする所を。私か通り合して助けて遣り。  
 伊勢崎の錢屋へ掛り手と分けて探して費つたが。何分娘の行衛が知れ  
 さいがら。八州へ頼み段々畧取しの詮議とする。馬方の倉八のいふ  
 奴と松五郎源藏といふ三人と縛つて。名主の庭へ連れていつて。調べて  
 見ると。親子連れの護摩の灰よ。三兩宛金と貰て頼まれたと白状したの  
 ら。三人の送られて任舞たが。親子連れの護摩の灰の行衛が知れず仕様  
 がねへ。ら。マアお龜を私の所へ連れて來て置くうち。縁あつて今じやヤ

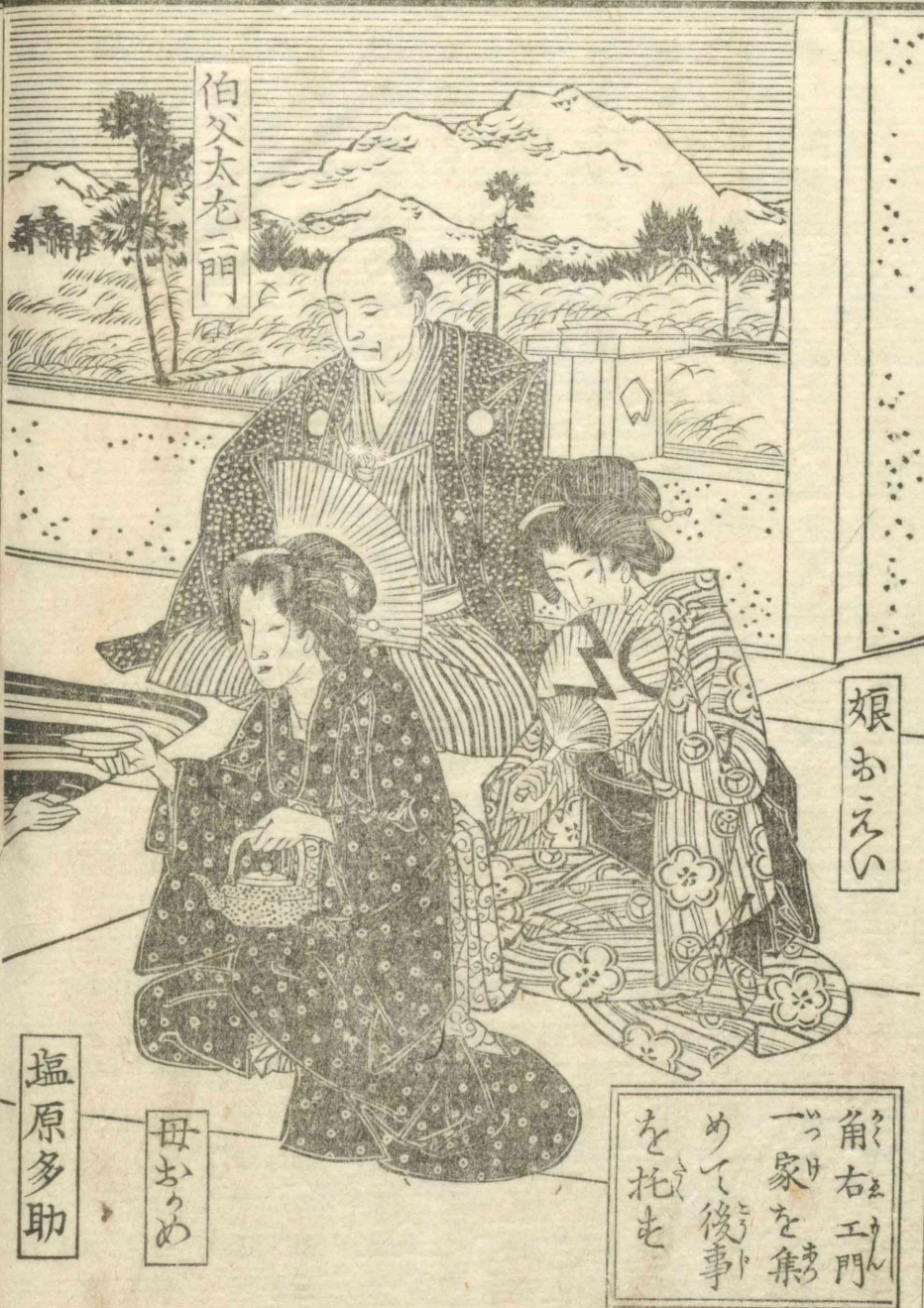


女房よしてゐる譯だが。まけを表向にするなら。おしなせへ伊勢崎の錢  
 屋へ係つて調べの終と戻せば。御氣の毒だが。前達の腰へ繩が付べ  
 と云ふ考へだ。夫れでもいゝなら遠慮とないから。出る處へ勝手よ御出  
 なせへ。なんどうなら己等が方から出べいと思ふんだが。そんな荒へ事  
 もしたく終へら。五兩の金と上げべから。草鞋錢と思つてこれで歸  
 るから。最う紛紜はあし。娘を返したと云ふ書付と。一本置いていつて  
 下さい。小平。れ前さんそんな解らぬ事を云つちやア困るじや。終へら。  
 七歳の時々ら育て路金を遣つて。斯様な山の中まで尋ねて來て。五兩ば  
 かりの端した金と貰つて。歸へられるか歸へられ終へか。考へて御覽あ  
 せい。角。歸へられ終へけりやア。どうする。己が方から訴へて調べの終と  
 戻せば。五兩の金も取れないばかりであく。腰に繩が付んでが。五  
 兩の金も遣り度もないから。いやならそうしやうか。かく。どうもれ前さ  
 んそんな只どうも。小阿母の云通り五兩ばかりの金じやア。しやうがね  
 へ角。否やなら訴へる方がよかんべへ。訴へるがいゝッてそんな勝  
 手な事と云つちやア困ります。終へ。五八は先刻のら此様子と見て居て  
 五八。旦那さん。かういふ奴は矢張話しの終と戻して。繩ア掛けて名主様  
 へ引て往て。闇へ所へ押入る方がよかんべ。鳥渡名主さんの所へ往て  
 くべいか。かく。れ待ちあさいまし。歸ります。ヨと訴へられて。身の破滅  
 だから五兩でも取らぬ損と思ひ。小平や書付と書きなど云はさ。  
 しぶくしながら。小平は書付と書き五兩の金を請取り出て行ました  
 が。残念で堪りません。故どうして再び零取さうと思ひ。須川村と云所  
 へ宿を取て様子と伺つて居ます。此方へ安心致しました。所が六月月  
 初まり又なります。角右衛門は。風の心持から病が重りて。どつと床よ  
 就きました。孝行な多助と心配いたし。神佛も願をかけ。精進火の物  
 斷で。跣足參りを致します。が。何分効驗も御坐いません。角右衛門の村  
 方。一に能く思ひれて居る人故。あわる。見舞も參るうち。六月の



鹽原多助 伯父太七 娘おえい

伯父太七 娘おえい



伯父太七

娘おえい

母おぐめ

塩原多助

伯父太七 娘おえい  
一家を兼  
めて後事  
を托せ



百姓角右三門

百姓五八

八

鹽原多助 伯父太七 娘おえい

伯父太七 娘おえい



晦日頃は。最う息も絶へくまありましたゆゑ。家内親類枕元を取巻き  
 看護をして居り。分家の太左衛門も参りて。伯父の看病と致して居りま  
 す。角右衛門と苦しい息をつきながら。太左衛門く一寸爰へ來う太  
 「ハイ伯父様貴君しつかりし條へではいけませんヨ。七十八十の爺さま  
 でお返し。死ぬかんとといふ。弱へ氣と出してはだめでがんす。角だめだ  
 つてだめでねへつて。今度とせうしても死病と諦めたら。汝が又只た  
 一言臨終云ひ残す事があるから。爰へ呼んだんだが。お龜も爰へ來う。  
 多助も爰へ來う。た榮も五八も皆呼んでくれ。云ふから大勢枕元と取  
 巻きました。龜旦那しつかりなさいヨ。貴所しつかりして下さいヨ。多  
 爺さん氣と體前に持て。達者になつて下さい。角太左衛門。己が血統  
 といふ。汝より外に條へ。太私も幼少うちお親父に死なれ。又阿母も  
 早く別れ。今迄皆お伯父様の世話と成た事。私も心得て居ますから。貴  
 所が達者で居て。私もこれくら。ちつたア貴所と樂でもさせべいと心得  
 て居やすのら。弱へ心と持ちや。だめでがんすヨ。實と爰も居る多助と  
 己が跡目相續と貰つた譯といふものは。十三年跡八月二日。千鳥まで田  
 地と買に行くとき。逢貝村で。今の噂々のお龜の先の亭主岸田屋宇之  
 助と云ふ旅商人。元阿部様の御家來。鹽原角右衛門と云ふ己と同じ名  
 前の士の家來だが。其御主人の覺右衛門様と云ふ人。小川村へ浪人し  
 て居た所。八年振りで宇之助さんが。御目に掛り段々の話して。せうの主  
 人と再び世に出して。宇之助と云ふ人が己が金と持て居る事と知  
 て。跡と附けて來て金を貸してくれろ。主人と世に出してへから借せと  
 云ふのら。己ア盗人だと思つて盗人くどがある。突然脇差と引抜て  
 追驅けて來たのら。逃げべいとそると。木の根へ躓づき打轉がる。己の  
 上へ乗し掛り。殺べいと云ふ譯だ。太ハアエーこれの初めて聞きやした。  
 成る程どんだ譯で。角所がなア己が下で盗賊くどがなつてゐると。其  
 時向ふ山を通り掛つた獵人の。鹽原角右衛門と云ふ浪人で。己のがなる

九

鹽原參助一代詰第五編 速讀法研究會



と聞て。助けべいと思つて。現世忠義の家來あり。妹と片付れば弟も同様  
 な岸田屋宇之助と鉄砲で打たへ。太「ハアエー成る程大けへ間違へまな  
 りやんした角それがサ間違へで。さうすると其獵人が驕付けて來て。死  
 骸と見て魂消て。ア「右内か知んなかつた。我が浪人して居るのと世に  
 出してへと思つて。金が欲く成つたかへ。そうとは知らず汝と打た。ア、  
 可哀さうな事としたつて。其立派な士が男泣きお泣くつてや。太「ハ  
 アエー成る程フンとんだ氣の毒な間違ひで角すると。ア。しやうがね  
 へうら己も手傳て其死骸と鉄砲で擔いで。小川村の浪人の内へ行て。名  
 乗り合て見ると。向ふも鹽原角右衛門。己も鹽原角右衛門。同じ名前不  
 思議に思つたから。段々聞て見ると。元は野州鹽谷郡鹽谷村の者と譯が  
 分つて見ると。元は己と由縁のわるものと分つたから。命が助つた替り  
 ぶ。金と向ふへ遣り其時貰つて來たのが。爰に居る多助ヨ。太「ハアエーと  
 んだ深い縁てが。角すると其年の九月の五日に。保泉の原中でお龜、  
 と助け。段々様子を聞け。娘が畧取され亭主が死だ事と聞き身投けて  
 死ぶと。するのを。段々論して止めて置くうち。先の噂々が死んで。汝等  
 が勧め。斯うやつて。今じやア女房も持て居た處が。此二月江戸へ往て  
 火事場から連れて歸へつたお榮の。十三年跡畧取された娘だといふ譯  
 うら。斯うして居るのだが。己が亡い跡で。此多助も。さうせ女房を貰つ  
 てやんねへけれ。心なんねへが。お榮と多助とは十九と廿。年合もよかん  
 べいと思ふ。阿母は多助の爲め。い實の叔母あり。するから血統三人で  
 此家と履め。お大丈夫。さうして太左衛門。汝が後見をして農作の事から  
 何のら萬事指圖として呉れば。此鹽原の家。潰れめへと考へるから。己  
 の息のあるうち。お榮と多助と盃をさせ。夫婦にして年一度も。小川村  
 へ往て。右内と云ふ人の法事供養をさせてくれるやう。汝も頼むのだ  
 が。己の考へ。いわるんか。太「悪い所じやアねへ。誠にはア尤もの譯だが。そ  
 りやア貴所が快癒した跡の事。でよかんべい。角治ら。縁へと思へばこそ盃



とさせるのだ。サア爰へ来て早く内輪ばのりだのら。酒だけていゝ太左衛門。煤よあつて早く酌と。急ぎ立られ多助お榮の兩人は。恥かしさうよ坐つて居る所へ。太左衛門は酒と持て来て。マア嫁ツ子からと云入れた時。いふんと云ふべき言の葉も。岩間の清水結び染めて。深き恵み感しつゝ。有難涙よ暮れて居りましたが。角右衛門の七月二日終つ病歿り戒名。一庵了心信士と申し。只今又八軒寺町の東陽寺と云ふ寺に石碑が残つて居ります。先つ野邊の送りも濟せて仕舞。それのら三十五日よ。多助のれ龜よれ榮と五八と連れて養文の寡参りに参りました。其時用事あつて太左衛門と参りません。参詣終りて四人連立ち歸り道で。雨が降り出しましたから。多五八や雨が降つて来て困るな。澤山の降りも有まいが。ひどくなるよ困るのら。此木の下に雨宿りして居るのら。驅て行て傘と取て来てくん。な五へい往て参りませうと。急ぎ足で往てしまふと。いづのら附けて居りましたか。道連の小平と繼立の仁助が横合のら。頰冠りして出て来て。突然お榮と擔ひて連れて往ふとします。ゆゑ多助の驚き。一生懸命小平の足にしがみ付き。盜賊くくと云ふのと。エ、邪魔するなと蹴りへせぬ。多助の仰向けに倒れたが。又起上り取つければ。れ龜も驚き取りつく所と。横面を擲倒と。又這寄てしがみ付くうち。づるくと。れ榮と仁助が引ずりながら。脇道へ入り込榮ア。レ一人殺しくと云ても。田舎の事も。助ける者。一人もなく。所へ通り懸りました。土岐伊豫守様の御家。來原丹次同丹三郎と云ふ親子の士湯治よ参りまして。歸り掛け。先程のら女の聲で。人殺しと云ふの。何事あるかと。急いで来て見ると。雨の中で打合が始り。大の男が女と捕へて。蹂躪ります。様子に烈しいゆゑ。見兼ねて丹次どのが。突然女と連れて逃げやうとする。仁助の横髪を打つ。打たれて仁助の跟ける途端。前足と擧げて。とたど蹴られて。尻餅とつく。又小平が向つて來やつと。扇子を以て。トーンと頭と打ちました。のら兩人の呆氣よ取られて。居りませぬ。丹次「狼藉者女を捕へて何とする。龜

豊前参勤一付詰第五編





路連小平

原丹治  
悴冊三郎

お忍び

國

拳

おあめ



次立二助

悪漢新婦を  
畧取せんぞ  
〜二士  
看破せらる

塩原多助



御庇様で助かります。娘と零取さうとする悪い奴で御坐います。どうの殿様御助けくださいまし。小殿様の何も知らねへからだ。ア、痛へ滅法よ頭と打たれた。殿様此亞魔女の私の妹ですが零取して江戸から此沼田の下新田まで連れて来た事と知り。阿母と二人で掛合よ来やしたら。土地の者に叶いねへ。大勢万せい寄りたかひて。私共も赤恥をのうせて歸へさうせするから。腹が立て堪らねへ。私が妹と私が連れて行くよ。何も不思議いねへ。龜殿様なアこれの私の實の娘で御坐います。が七歳の時。那奴が零取したので御坐います。小ナ殿様の何も御存しさいのだ。私の妹と違ひさいのだ。此間の火事で阿母も放れ。行衛が知れねへ。のら。段々様子を聞く。此所よ居る事が分り。路金を遣ひ此様お山の中まで尋ねて来て。手ぶり編笠で歸られませう。龜さうじやアありません。那奴から私の方へ。此娘と渡したといふ證文を入れ。印形まで捺てよこしたから。金子と五兩遣たので御坐います。小旦那何も御存あり

ませぬ。丹次何だが貴様達の云ふの。我もいさつぱり分らんと云ひな。のら。お龜も向ひ一体どう云ふ譯だ。龜全くの私が娘で七歳の時零取された者で御坐います。丹次さうだらうを云つて居る。後ろに立て居た。悴の丹三郎は折々朋友に誘はれ。三田の仇屋へ遊び又往た事がありま。すから。梅も小平も兼て知つて居る事もある。丹三御爺様あの男の道連れ。の小平と云ふ悪い奴で。護摩の灰おどと承はつて居ます。阿母も飾程悪黨ださうで御坐います。嘘で御坐ませう。儲の其娘の幼年の時櫻つて来たの。知れませぬ。何んでも其奴の護摩の灰だと云ふ事です。小何んだ人と護摩の灰と云つたナ。丹三黙れ。貴様我と知て居る。だ。ろ。同役と一所。貴様の家へ往た事があるが。護摩の灰だと云ふ事だ。グズくすると手打ちにするぞと云はれて。兩人の悪漢の這々の体で逃げ行きます。跡に親子三人の者の。大喜びにて。マア兎も角もお禮を申したい。のら宅へ入しつて下さんと云ふので。これから丹次親子と下新



田の宅へ連れ歸りましたが。おれが多助の爲め大難の來る起りと相成ります。お話しと次回までお預りよ致しませう

鹽原多助一代記第五編 終

鹽原多助一代記第六編

三遊亭圓朝演述  
若林珪藏 筆記  
酒井昇造 助筆

第六回

淫婦誣罪孝子苦  
姦夫伏謀良馬知

鹽原多助わ養父角右衛門が死去しまして三七日の寺詣りよ参りました。歸りがけ悪徒小平仁助の爲め。お榮が再び攫はれて参る所へ通り掛りましたの。士岐様の御家來原丹治父子で。危い難儀を救つて呉れました。ゆゑ實に地獄で佛の譬の通り。誠難有む方様で。どうか私宅まで入らつしやいます。様何はなくともお禮を申上度と申し。又お榮の三田の仇屋に居りました時分。丹三郎がチヨクく遊びよ参り。知己であるし。もる所から打連れ立て多助の宅へ寄り。馳走よ成りました。



が縁となり。是より度々此の家へ丹治父子が遊び參り出すと。丹治も年四十五歳かれとも。鰥暮しで御座いますし。お龜も夫角右衛門が死に去りまして未だ三十七と云ふ年で。少く梢枯れて見ゆれと色ある花は匂ひ失せせ。色氣澤山で御座います。殊に家來宇内と密通して家出をした位の浮氣もので御座います。酒の上と云ひながら。遂に丹治と密通致し。お龜へ深く丹治を思ひます。世間の手前多助の前もありまもが忍びく。逢ふ事も度重なり。今で最も耻かしいのも打忘れ。公然で逢ひ引きを致し。まもゆる。人の目つまは掛ることも度々あり。お龜へどうか丹治と一つななり度。さうするに多助を退出さなければ。邪魔も成て。ませんが。多助を追ひ出す。如何したら宜らうと考へまも。又悪智の出るもので。丹三郎も未だ單身ものなり。どうか丹三さんとお榮と色でも成たなら。お丹治さんと供々未永く樂しめる。だるうと思ひまして。主あるお榮も色事を勧め。丹三郎と密通をさせ。母子同志で奸通を致し。誠宜しからぬ事で。多助も薄々知て居ります。が。事荒立て。血で血を洗ふ道理。家の耻己れの耻。殊に亡なつた養父角右衛門のお位牌へ對して。濟まないし。嗚呼情けなき。心得違ひの母親。殊に女房お榮まで。左様な事を致すと。犬畜生の様な奴。思ひます。が。どうも事を表向きに。事が出ません。相手は御領主土岐様の御家來なり。迂濶の事を云ひ立てる事。出来ません。が。どんな人の好いものでも。自分の女房を人よ奪られて。腹を立たないもの。御座います。から。多助も腹が立ちます。寧ろ此の家を驅け出して。仕舞ふかと思ひました。が。いやく。此の家を出たならば。必ら原丹治父子が此の鹽原の家へ乗込んで来る。違ひない。が。士に百姓業に迎も出来ない。から。鹽原の家は必らを潰れて。仕舞ふ。違ひない。どうも此の家を潰して。八歳の時から貰われて。育てられ。大恩ある親父様に。濟まぬ義理。石の上も三年の譬へも。あれば。どうか此處で優しく孝行を盡した

鹽原多助一代記第六編

二

速記法研究會



ら。終よハ母の心持も直り丹治父子を寄せ附けぬことよもならうかと  
 思ひ。母子諸共非道も多助を虐めるのを怨み返しも致しませんでした。優し  
 う孝行をそれバ猶更附上り。其年の九月もありました所益々多助を悪  
 みまも。多助も色白で短身な温良しい好い男で御座います。田舎稼ぎ  
 を致しまもから千々穢く。家よとて居る事も稀れで月も六度位ハ馬  
 を曳て歩行き。殆ど家よハ依り附きまもから日も焦けて眞黒もあり。  
 日向臭ひ。又丹三郎ハ江戸育ちのお士で。男振も好く小綺麗で御座いま  
 もから猶更多助が厭やで。實も邪見ももる事全一年。その間一つ寐もせ  
 ず振付けられても多助ハ辛い所を忍びく。て馬を曳て出まも。人よ  
 話も出来まもから泣きながら馬を曳て歩くので。世間の人泣き  
 多助く。と綽名を致しす位の事で。それでもお龜母子ハ増長して多  
 助を虐め出さうともるうち。丁度八月朔日の事で御座います。丹治父子  
 が多助の宅へ参りましたゆゑどうか多助を無いものとまやうと思ひ。

お龜ハ丹治も向ひ。龜私も。アこうやつてお前さん。何時も御無理な  
 事を願ひ。貴郎も御非番の時。は度く来て下さいませ。御役人様ゆゑ  
 お泊りなさる事も出来まもせんけれども。どうかして月も五六度はお泊  
 め申度と思つて居りまも。世間の手前多助の前もありません。思ふ様  
 参りませせんが。眞實も此頃は變も多助が悪らしく成て來ました。丹治  
 斯うやつて父子で度く遊び來るのは宜しいが。多助も馬鹿でない男  
 だから疾より訝しいと考附いて居るだらうが。來る度ハ厭な顔もしあ  
 いで。旦那様能くいらつて。お母さん御馳走をして上げて下  
 さいよと。へい。云て疊へ頭を擦り附けるやうもされるので。何ん  
 なく來よ。つて。ノウ。丹三郎。丹三。毎度親父様も左様仰やつていらつ  
 しやるのサ。龜。ナア。貴郎彼奴だつて私の子です。私から私氣も入らな  
 ければ叩き出して。宜いので。さうもいさませんから。何んぞ仕様が



あつたらばと思つて居るんですが貴郎も能く心掛けて置いて下さい。と  
 話しをして居る所へ奥からお榮が手紙を持って出て参りました。龜「旦那  
 様がお兩人来ていらつしやるのよ何をして居るんだヨ。マア此處へお  
 座りヨ。榮「オヤ旦那様能くいらつしやいました。アノお母さん。多助さん  
 が今朝帯を締める時袂から之れが落ちましたヨ。と手紙をお龜の前  
 へ出し榮「分家の作さんから多助さんの所へ寄越した色文で。マア馬  
 鹿くしい事が書いてあるノ。龜「オヤマア年頃になるとわかひなもん  
 だねへ。多助がいゝとか何んとか云て惚れて居るさうだが。マア旦那此  
 文を御覽下さいヨ。と云ふ。丹治「とれくと云ひながら其手紙を取  
 り丹治「成程幼少うちから機織や糸練ばかりさせて置いて手習杯をさ  
 せんから手の書けないのは無理もないが俗よ云ふ貧の盗みよ戀の歌  
 とやら。妙だなア鐵釘の折れの様よポツと書いたなア。エ、なに

一「書きたる者」  
 おる心ざんとり女房の何ふおたから  
 女房のる遠いおららるおんやして。結月お  
 だらうナ  
 あんぞごおのひ中んは。おまの聲を  
 一日お孫「お孫お孫」  
 かん「お孫お孫」  
 い「お孫お孫」  
 日待「お孫お孫」  
 噂「お孫お孫」  
 フ「お孫お孫」  
 ん「お孫お孫」

徳川参勤一住書第六編

四

遠近法研究會



アハハ、これで九で附け文の様だ。と丹治が手紙を讀みました故。お龜のこれを好機會として分家へ話しをすれば分家の爺の堅固いから多助を追い出すのの時間暇いらむだから。期ういふ都合よしませう。彼云ふ都合よしませうと。密々話しをして居る所へ何とも知らず。佛と云われる多助が歸つて参り。勝手の方から上つて来て多旦那さんお出なさいまし。此間の私等が留守の所へお出でがんしたさうでんした。何時もろくを物もあげましねへでお勿々べい致しやを。今日又能くいらつしやいゝんした。丹治オ、多助か。毎度来て厄介な成て氣の毒だ。外は馴染もないものだから夫ゆゑも期うやつて来るのだが。お前も幼少い時から田舎漢な成たけれども。江戸生れださうだが。期うやつて江戸子同志で寄集るといふ誠な頼母しいものだ。毎度種々馳走な成て濟まない。決して構て呉れるを多何よりも上げる物のがんせん。お母さんとうか旨い物を出して御馳走をして上げて下せへ。と云ひながら表へ出よ

掛ると龜出て往ちやアいけねへヨ。少し話しがあるから待ねへ。お前眞實な呆れた苛い奴だヨ。此節の家へ寄り附かないと思つたら分家の娘お作と私通をして居るね。多「へいなんでおねへ龜」とばけなさん。お作と結契して居るだろうヨ。多「コリヤアア驚愕たあア。お母さん誰かそんな事を云ひやんした。分家の娘と浮氣狂ひをした覺へんがんせん。龜「オ、何程口の先で不知を切ても書いたものが證據だ。之れでも虚だ」と云ふか之れを見ナと。彼の手紙を多助の前へ投り出を。多助「手は取り」コリヤアお作が已ん所へ寄越した手紙だが斯様ナ手紙があつたか。困つた奴だナアア。お母さん私が所へ此の手紙を送たか知りません。私覺へは御座りやせん。とうして尊母此の手紙を持って居やん。多助さんお前さんが今朝衣物を着換へる時襟から落ちたから私がお母さんお目も掛けたのだが。お前さんもあんまりだね。私もこ



かないが。其様な私が入らなければお母さん話しを付けて貰  
て離縁状を書いて下さい。龜お榮の私と只一人の可愛い、娘其  
連れ添ふ夫と淫事をされては世間と對して外聞が悪いから。世間へ知  
れたい内只た今お榮と離縁状を書いて渡して遣つてお呉れ。多「お母  
さん。どうぞ御免なすつて下さいまし。假令書いたものがありやしても  
知りやせん。私お作と淫事アした覺へは何處までもがなせん。又お榮と  
離縁状を出す事ハ出来やせん。丹治「コレ多助何もそんな未知を  
切る事はない。此方ハ書いた物と云ふ儘かな證據があつて母が云ふ  
のだ。又男の働さで一人や二人の女をこしらへるの且當前だから。結契  
たら結契たと云ふ方が宜しいハ多「宜も悪も私些ども覺へはかん  
せん。龜書いた物が何よりの證據だ。お前が幾計知らないと云つても  
無益だ。これから分家へ往つて話しをせよ。一所も出。と云られて  
多助は當惑致し。多「分家へ往つて。コレハどうも困りやしたな。叔父さ  
んは物堅へからそんな事を聞せたら怒つて私い濟みません。出へい  
りも出来なくなりやんすから。どうか御勘辨を願へて。龜「御勘辨たつ  
て儘かな證據であつて見れば仕様がな。さう云ふ簡ならばお榮よ  
添わして置く譯。又わいませんと云つて何時で獨身でも置かれな  
いから亭主を持たせるから離縁状をお出し。何故離縁状が書けないの  
だ。多「何故書ねへつたつて是れはいはどうあつても書やしねへ。死ん  
だ親父様の遺言。我れとお榮との從弟同志だから夫婦としてやるが。  
苟めよ。喧嘩して夫婦別れをせよ。やうな事がある。草葉の影から勘  
當だぞ。云ひやんしたから。私も大概な事があつても親父様よめんして  
堪へて居て。何一つ云つた事ハがなせん。私も我儘ものでがな。我が家内  
で物争ひが出来て。お榮を離縁しては。どうも死んだ親父様の御位牌へ  
對して濟みやしねへ。お榮と私が氣に入らねへ。夫婦も成て居る  
のが厭やあら。厭やで構いんやせんから。家内ハ切れても表向きだけ



の夫婦と云ひなければ世間へ對し。分家の叔父様も對して濟まないか  
 ら。どうぞさうして下せ。龜「それ程義理を知て居ながら何故分家のお  
 作と淫事をしたヨ。ぐせぐせして居てじれつていな。と云ひながら。有合  
 せた細い粗朶で多助の膝をヒシイリくど打ちまをから。多助の泣き  
 ながら多御免なすつて下せへまし。と云ふを耳も掛け之れでも云  
 はねへか。くと二つ三つ續け打ちも打れて多助の心の中で情ない  
 は思ひながらも。しほらしく多お母さんとうか堪忍しておくんあんし  
 と。下から出れば附け上り。お榮も共々幕り立て多助よくつて掛る所へ。  
 入つて来たのは此家の分家の太左衛門で此の様子を見兼ねましたから  
 ツカ。くとお龜の傍へ参り太左衛門「マア待たんしよ。何んが多助。マア  
 く私が来たから待てお呉んなんし。ヤイ多助。汝大へ形をして母様も  
 折檻されると云様。赤馬鹿な事が有るか。母様とういふ譯だか知んねへ  
 がマア待つて御呉んなんし。龜「オヤお前さんがお出でなさらうどの思

ひませんでした。ほんの内情だけの事で。餘り私も腹が立ちまをか  
 ら。竟暴いことをしました。が。今お前さんの所へ往うかと思つて居る所へ  
 アノ。御城内の原さんがいらつしやつて太「是れへ。イ。毎度多助から承  
 わつて居りやまが。私の一ッ村方でも上下を隔て居りやまから。ろくも  
 此家へ参りやせんから。御挨拶も致しやせん。何分御最賃を願ひやま。と  
 慫慂も兩手を付きま。と丹治「イヤ。とんだ間違ひでね。手前も迷惑を  
 致した。太「何か知りやせんが。届かん奴で。意氣地なしで。が。んすから。それ  
 で。陀母も打れるといふ馬鹿で。多助。汝。此處の家の相續人で。汝が。此家の  
 心棒だ。一軒の主たるものが。假令どういふ悪い事が有つたつて。母でも  
 妄聞も打れるといふ論はない理だ。何を失錯た。多「私悪で。が。んすから。叔  
 父さん。お母さん。お母さん。と説言して下せへ。お願でん。太「ナ。悪事を仕た  
 んだへ。龜「ナ。お前さん。とうも人。話も出来させんけれども。云ませう  
 が。實にお前さん處のお作さんと多助と結契て居まをねへ。太「ハテ。それ





原丹治

原丹三郎

おゑい



伯父太左門

塩原多助

孝子將也  
西人の好  
策の階ら  
んと先

母おろめ

彫工野口圓活

塩原三郎一作請書之繪

遠請活版務會



ひとり云譯で「親の目つまを忍び逢引するが色事で有ますが本家分  
 家の間柄で横道た事をして居まをから私か嚴く云いなければ世間様  
 へ濟ませんヨ。是を見てください。と云ひながら彼の手紙を太左衛門の  
 前へ置く太「ハイ成程。已アお作が多助へ送た女だが馬鹿なマア。此間ま  
 で青鼻アくつ垂して柁の葉で笛を拵へて遊んで居のが。ハアこんな事  
 を仕出かそ様成たかゝる。ナント馬鹿くしい事だの。お龜さん此手  
 紙の文を讀と。娘が多助も惚て手紙を送たか知ねへが。多助が方での知  
 ねへ違ひねへ。といふものは未だ結契たとも。色事をしたとも。文面よ  
 證據のねへの之を證據よして荒立て。事を出かせバ此處の家も已ア  
 家も耻成からこれの私よ負けてお呉ませへ龜「お氣の毒ですがまけ  
 られませんヨ。他の事との違ひまも。眞實に呆れた奴で御座いまも。多助  
 がさういふ根情だ。お榮が可哀さうで御座いまも。今の中よ切れ  
 話よして。お榮よ實のある堅い亭主を持たせる了簡でよから。離縁状を

書いて見たした其上で。多助をお作さんの婿よするとも。とうとも勝手  
 よおしなさいヨ。太「未だ色事を出かした譯でもねへのだから穩便よ濟  
 ませれば世間へも知んねへから龜「いけやせんヨ。馬鹿くしい餘りな  
 不人情だからお前さんはやく離縁状を書かせて下さいましヨ書かせ  
 て下さらなければ私もお榮と一所よ出て往きまをヨ。太「おめへが何  
 出る譯のあんめへトやねへか。そんなら是程頼んでも勘辨の出来やせ  
 んか。已ア娘の未だ亭主のあるものじやねへ。處女で御座いやす。龜「だつ  
 てお作さんの幸右衛門との悴の圓次郎さんが養子よ往く約束成  
 て居るトや有りませんか。太「約束成て居りやまが未だ結納を取り交  
 した譯でもなく。唯はんの口約束だけの事で。婚姻をした譯でんがんせ  
 んからどういふ事が有ても奸夫と云ふ譯のあんめへ。又男の働さで一  
 人や二人の女も出来ねへとも云いれねへ。それ處トやない立派な亭主  
 持の身で有りながら奸通を走るものが世間よハ澤山有りやす。一昨日



店で盆の餘り勘定をして居ると彼處で酒も賣り看もあるもんだから。若いお士が腰掛けて一抔遣て居る。其人の年頃いさう廿二三で。恰と其處に入らつしやる丹三郎様位の年恰好で。貴所も能く背て居るお方サ。そると姦婦が艶書の傳を兒守子と頼んで。手紙を其お士に渡さど。お士が惚れた女から寄越した手紙だから。飛立つ様も喜んで其文を開いて讀んで仕舞ひ。丸めて袂へ入れた積りで出て往た跡を見ると。其手紙が落ちて居たが。之れは濟まねい譯だと思ふが。此文の文面で見ると。去年のマア八月あたりから姦通をしやアがつて。今年になるまで結契いて居る。其亭主が邪魔なるもんだから。追出して仕舞てへと思ひ。科もねい者へ不義の名を付け様とさるだ。太い亞魔じやねへか。と云ひながら。懐中より手紙を取り出し。ナニ名前の丹三郎さま参る。おゑいより。何んだ手を出さねへでもさ。ヨ。似た名も澤山事あるもんだ。おゑいより。丹三郎さまと。聞くよりお龜も顔色變へ龜つまらな事ををし

なさるな。と云ひながら。太左衛門の持て居る手紙を取掛る。太手を出さなくつてもい。ヨ。斯ういふ悪い事をする太い亞魔があるだが。天命で此文を落し。己が手に入るのは罰だ。併し之れも世間へ出せねへ文。己ア娘の書いた此文も世間へ出せねへ文だから。此二通とも一處よして。居爐の中へ投つ焚て反古ますべいとやねいか。私に預けておくんなさい。世間へ知れ、ば家と疵が附て。お互の恥だ。と云てお龜は丹治父子と目と目を見合せおどしおがら龜「お前さんが入て口を利て下さいましたから。これからは當人も謹みませうし。實もとうも捨て置かれませんから折檻しました。そんなら此手紙はお前さんよ預けますからと。うでも好い様よして下さいまし。太「それは有難こんだ。コレ多助ヨ。去年の六月三十日。汝へ親父が死ぬ時。枕元へ己を呼んで云ふのに。お榮よ多助。從弟全志なり。今の母様は多助の爲めには實の叔母だ。一家と血統が寄集り。此家を相續さるだから。徳原の家よ取ては此位な芽出度事



はあんめへりら。多助がお榮と夫婦別れでもする様な事が有たら。汝へ後見人よ成てどうか鹽原の家よ疵を附けねへ様よ頼むと死んだ親父の遺言をば。此文の様よ反右よされていだめだぞ。馬鹿野郎。汝様な意氣地なしがあるかい。二十歳を越した男が母様よ打れるとは情けねい。こんだ。己ア家へ來う。澤山小言云わなければなんねへ。多「重々濟ましねへ事よ成りました。どうぞ堪忍して下せへ。お母さん能く勘辨しておくんなすつて。有難がんを直ぐよお宅へ往て御異見を受けます。太「誠よ皆様よ御迷惑を掛けやした。左様なら。態よ多助よ荒々敷いひつ、引立て。太左衛門は歸りました。跡よ丹治はお龜と顔見合して太息つき。龜「どうもねへお榮間拔じやないか。丹三さんへ贈る手紙を無闇よ守子杯を頼む奴があるものか。いけねへ。ヨ。さうして爺よ拾はれ困た事をした。なんぼ年がいかないからといつて軽浮ばかりして居るヨ。氣が利かない。いじやないか。多助が婦らないうち丹三さんをお寐かし申しなと氣を

利かして二人を次の間へ遣る。丹三お榮の屏風の中よ入て逢引を致します。跡にお龜と丹治と差對ひ。龜「あの爺は何んぞといふとワイ。多助の最負をするので私にしみ。多助が憎らしく成りました。且那貴所とうか多助の蓄生を殺してください。丹治「殺してくださいと云て殺した跡をとらる積りだ。龜「殺してさへ下されば誰だか知らない。大方追剝でも殺したのだらうと云て。濟せまを當人さへ居なければ名主へ一寸話をして置まをから。時が經から丹三さんは病身でお屋敷奉公の出來ないよ云ふ所からお榮の養子よよこして下さい。さうすれば貴所へ御城内よ勤めていらしつても。御隠居といふので表向きよチヨク。お出よ成るよ都合が好いじや御座いませんか。丹「迂潤村方で殺害と百姓共よ考付れるといかんから。迂潤とい出來ん。龜「此五日よ多助が元村よ小麥の俵を積んで往ます。日暮方から遣まをから山國の事ゆゑ天氣の好いの當にならないから。桐油を掛けて往きよと云て。鹽



原と大きく書いてあるのを掛けてやりませから。見違へる氣遣ひの有  
りません。多助が馬を曳て歸て來る時桐油を見當ふ庚申塚邊て。むちや  
くちや又斬り殺して。お屋敷又歸り。知らん顔をして居て下されば。此方  
で試し斬りよでも逢たとか何とか云て極りが付てから丹三さんを  
よこして下されば。三百石持の主人。それ未だ些どの貯金も御座いま  
す。丹跡方の知る様な事が有てはならん。龜「大丈夫で御座います。と云  
入れてそんなら。ばど。庚申塚又身を潜め多助の歸を待受て斬殺を了簡  
ふ成りましたが。誠不届な奴で御座います。其日丹治父子が歸り。扱  
五日又成りました。多助何にも知らず馬を曳いて諸方を歩るいて夕  
方歸つて参りました。龜「アノ御苦勞だが。追々秋々ち用が多いから。直  
ふ小麥を積んで往て來てお呉れ。又降るといけなから桐油を掛けて  
いきな。アノ新しい方がい、ヨ。と云ねれ多助ハハと云ひながら。曳慣  
れた青といふ馬を曳て。御城下の元村へ参ります。道ハ三里餘り。上

下六里の道で御座います。何程急いでも只今の十時當時の四ッ餘  
程過りました頃で五日の宵月は木の間に傾き。臙臙。庚申塚までハ三町  
斗り手前の所で参りました。馬ハ自然主人の危難を悟つたものか  
足が進みません。段々跡の方へ退ります。故多青困るべいじやねへか。  
ヤイ青。荷を皆な下して仕舞て單身又成て、歩けねへ事ハあんめへ遅  
く歸ると母様又叱られるから急いでくんろよ。さう跡へ退ッちやア困  
るべいじやねへか。青々とうした青。と云ひながら力を込めて鼻綱を曳  
きませすけれども少しもき、ません。曳けば曳くほど馬ハだん、跡を  
退るから。多助ハ涙ぐんで馬を曳出さうと致しままが中々動きません  
すると後の方から荷を擔で來る人の足音。只見れば幸右衛門の悴圓  
次郎と云て。今年廿五歳となり。多助ハ極中好一の友達で御座います。  
圓「其處に居るの誰だ。多圓次とんかへ。何なねへ。ア元村まで往た歸  
りだが。ア青が此處で急動なくなつて。打ても叩いても跡いべい



退がつて困るだ。圓「そりや困たナ。已見てくれべい。」と云ひながら荷を卸し。馬の傍に寄り。圓「コレ青や。どうした。コレ跡へ退るか。足でもどうか成てるか。痛む氣遣はねへが。多助の母様は喧ましい人だから早く往てやれ。青、どうした。汝、塩梅でも悪いか。そんな事を云ても馬、何共申しません。圓「誠、困たナ。已曳いて呉れべい。ハイ、く、く、歩く様、成た多「誠、有難がんぞ。已手、はいねへからどう仕べいかと思た。サ、一處、参りやまべい。ど往きにか、ると多「アレ又止たヨ。青、どうした。圓「今汝へ歩いたじやねへか。どうした。動かねへか。と圓次が曳き出し。圓「ハイ、く、く、く、歩いて来た多「誠、有難へ。平常こんな事はねへ。どんな重い荷、附けても悪い顔をする馬ではがんせん。アレ又止た。青々、圓「青々々の掛合で御座いま。圓「どういふものか。己が曳けば歩くだから。己此馬を曳いて往くべい。汝、此荷、擔いで呉れ多「ハア、さうして下せへ。そんなら此荷は己ア擔いで往きませすべい。と擔いで見ましたが多助の肩、力がありま

せんから、よるめきながら擔ぎ出た。圓次、馬を引きながら。シヤン、く、く、くと。庚申塚へ掛つて来る。此方は先刻より原丹次が刀の柄を握りつめ、裏と表の目釘を濡して今や遅しと待設けて居る所へ。通り掛りませるといふ。此の結局、何如相成ませすか。次回までお預りませ致しませう。



鹽原多助一代記第六編終

鹽原多助一代記第六編終



鹽原多助一代記第六編終





群馬県立図書館



0295192-9

県立  
館